

大正八年十二月發行

松陰先生遺筆擴大攝影

校友會雜誌

第拾八號

山口縣立萩中學校校友會

山口縣立 中學校 校友會雜誌第拾八號目次

訓話……………一頁
校長訓話三則……………七頁

講演……………
○栗田貴族院議員講演要旨
○渡邊文學博士講演要旨
○勝木大佐講演要旨
○上山貴族員講演要旨

文苑……………二五頁

○學生と實力養成……………第五學年 市川恒雄
○立志……………同 藤永裕
○漫言四則……………第四學年 石津有恒
○海國民……………同 梶山武夫
○希 望……………第三學年 坂一雄
○途上の所感……………同 原吉雄
○吾人の責任……………第二學年 服部達太郎
○最も快なりしこと……………同 吉村恒助
○秋の田……………第一學年 井町勇
○修學旅行日記……………同 杉田隆三
○第四學年……………山岸政吉

英文……………三四頁

OTWENTY MINUTES BEFORE THE SENTENCE

STUDY IN EARNEST V. K. Nagamine
OTO THE SOUTH SEA Y. S. Kishi
ORIKUGAHAMA IN SUMMER 4. Y. Shibata
Y. Sakurai

會誌……………一四頁

○山口縣體育獎勵會記事○辯論部記事○清純部記事○野球記事○劍道部記事○柔道部記事○京都演武大會出演記事○運動會記事○展覽會記事○大正八年度校友會役員○各中隊學科成績表○寒稽古出勤状況表○校友會に寄贈○校友會より寄贈○和船新造○校友會費收支決算○會友計報

校誌……………五三頁

○本縣師範學校長來校○文部省視學委員大島氏來校○長距離競走○卒業式○陸軍記念日講話○共通比較試驗○賞品授與式○軍艦觀覽○霧島艦長來校○山屋司令官一行來校○學友長選舉○西村中將講話○御成年奉祝式○修學旅行○藤井直喜氏講話○上山滿之進氏講話○海軍記念日講話○黒田風心氏講話○講話條約調印祝賀式○本縣内務部長來校○開校記念式○縣視學委員來校○文部省視學委員小松氏來校○寄贈品○送迎彙編○附錄

山口縣立 中學校 校友會雜誌第拾八號

訓話

校長訓話三則

一、タンクに就いて (大正七年十二月二十四日終業式に於て)

此度東京に於て、全國の中學校長會議が開催せられたので、本縣よりは、不肖ながら予が出席したのである。幸に中學校長連が集つたので、彼の裝甲車を實見したら宜しからうと云ふので、陸軍省と交渉することになつた。随分交渉は困難であつたが、幸に我々の爲に運轉して見せよう云ふことになつた。場所は世田ヶ谷の新練兵場である。

「タンク」と云ふ名稱の起りに就ては、我々も相當に研究はして見たのであるが、どうもこれほど感服する様な説もなかつた。所が此の時、或る武官からかう云ふ談を聞いた。「タンクは、最初英國が發明して、今度の戦争に始めて用ゐたのであるが、之を西部戦線に送るときに、秘密を要

することであるから、汽車に乗せるときに、上にカバーを掛けたのである。それが大きな水漕の形に似て居つたので、タンク(即ち水漕)と名けて送つたこと云ふことで、これがそのまゝ名となつたのである。こゝ、これが信すべき説であると思ふ。

タンクは、攻撃用の上より、ヘビー(重)ライト(軽)の二階級に分け、又之をメール(男性)とヒール(女性)とに分けて居る。而してメールの方は、四十七耗の砲を、ヒールの方は、機關銃を備へ付けて居る。それから又用途上より、其の主とする目的に因つて、五種類に分けて居るのである。タンクは、大砲に對しては効力はないが、歩兵の密集部隊に突進して、之をメチャメチャにするのが目的である。

我が國に先達て買ひしタンクは、一番小さいやつで、ヒール、ライト、タンクである。其價は十萬圓したところである。それが英國の使ひ古したものである。高さ八呎、長さ二十六呎、幅九呎、目方二十七噸武裝して三十一噸、一時間の速力五哩にして、普通は一哩である。此の速度に於て戦場を馳驅するのである。エンジン動かす油は、十二時間から十三時間繼續することが出来る。そして百五馬力を持つて居るのである。(萩小郡間を通ふ自動車は、三十五馬力あり。之と對照して想像せば思半に過ぎん)

普通の車は、軌道を地上に敷設して、其の上を馳するのであるが、此のタンクの最も面白きは、その軌道を自分が携帯して行くのである。即ち輪の周圍に帶の様なものがあつて、それが車が運動するにつれて、軌道となつて、其の上を馳走するのである。軌道の幅は一呎八吋である。かく幅が

廣いのは、車輪の地に嵌り込まぬ爲である。一體世田ヶ谷の新練兵場は、土がボカ／＼して居るのであるが、其處を今の幅の廣いレールを自ら敷設しながら、其上を運轉して縦横自在に馳驅する有様といつたら、實に猛烈なものである。而して其の輪の嵌り込む深さを檢するに、僅に二寸位である。乗員は、四名の縦縦者と、四名の直接戦争者と、一名の補缺とで、其の上に機關銃五門を戴せて居る。

スタンクは、三年前に、英國がソムの戦争に用ゐたので、その時獨逸は非常に驚いた。如く何にもして、之を分捕したいと思つたが、遂に之を分捕つて研究して、獨逸も製作したのである。今英國には、千五百輛のタンクを有して居るに、日本には、僅に一つ、それも英國の使ひ古したものである。云ふに至つては、實になさけない話ではないか。

タンクは、塹壕の如きは、自體を橋として飛び越すものである。又四十五度位の阪なら、自由に上ることが出来る。距離が短いと、殆ど直角になつた所まで行くことが出来る。ベルト即ち重箱の蓋の如きものに、齒が着いて居るものが、輪に設けてあるが、その齒で土を掻いて、一寸位の所までは上るやうである。實に驚怖すべき武器といはねばならぬ。

これからの人間は、國を維持するに、ボンヤリではいかぬ。本氣にならなければならぬ。此の歐洲戦争の間に、日本は非常に利益を得たこと、外人はいつて居る。さうして見れば、此の怨は、早晩日本に来る時があらうと思ふ。タンク以上の武器を發明せねば、此の場合に至つて、世界に敵することは出来ぬ。我々の將來は非常の努力を要せねばならぬことを、深く自覺せねばならぬ。

二、防長人の持久性 (大正八年五月二十七日海軍記念日)

關原合戦に於て、我毛利公には、不幸にして誠に殘念な敗戦をせられました。山陰山陽の統轄をせられた輝元公は、多くの將士を率ゐて、此の狭い土地に蟄居するといふ悲惨な目に逢はれたのであります。藩公を始め、將士一同は、此の狭い土地に押籠められて、如何に憤慨せられたかは、察するに餘りがあることであります。輝元公が萩に入られて十五代約二百六十年間は、此の敗戦のかなしみ、此の敗戦の殘念を、藩公を始めとし、我々の祖先一同は、一日片時も忘れたいことではないのであります。第六代綱廣公の時と聞きました。臣下が元旦の御祝詞を申上ぐる際に、家老の一人は、「幕府御追討は如何でありますか」といふと藩公は「まだ早からう時機が至らぬ」と答へられる所の式があつたといふことであります。此の言葉は極めて簡單ではありますが、關原の事を如何に殘念に感じて、臥薪嘗膽せられしかゝわかるのであります。又武士の子は、男子十二歳に至ると、母親は常に足を東方に向けて寝せる、そして「此の足をもて幕府を蹴倒してくれ」といふ言葉を、繰返して居たといふことを聞いて居ます。此の言葉は實に意味深長であります。此の言葉の中には、此の母も國の爲に殘念といふ重大なる意味の含まれて居ると思ひます。何時か時機が到來したならば、幕府を倒してやらうといふことは、藩公を始め我等の祖先の覺悟でありました。世人は、我々の祖先は持久性に乏しい、よく熟するけれども、直ぐ冷めるといつて居れども、二百六十年間も、以上の如く、絶えず其の恢復に努力するといふ事は、我々の祖先は、持久性に富んで居つたといふ事を證明するものであります。苟も事をなすには、徹底的にせよといふ事は、西洋の言葉のみてはない。衰

へて居る時にでも、大なる理想遠き目的を以て、突進し、決して油断をせぬとの事がなければ、之を成し遂げることは出来ませぬ。我々の祖先には此の如き持久性のあつたことを、決して忘れてはならぬ。我々の血液の中には、遠大なる理想目的の爲にする貴き分子が流れて居るのであります。で我々は、我々の祖先が、關原の敗戦に對し憤慨措く能はず、遂に維新の大業を成就した當時の意氣を以て、一層努力して大に我國の發展を計らねばなりません。

三、大戦終局管見 (大正八年七月一日講話條約調印濟祝賀式に於て)

大正三年六月廿八日、歐洲禍亂の本源地なるバルカン半島の一隅、セルビヤ國サラエボ市に於て、一青年ガブリノウキツヒが、奥國皇太子フェルデナンド大公を、一發の拳銃で暗殺したる事より、此の大戦亂は導火し來り、同七月二十六日、奥塞兩國の開戦の宣告を見たのであります。實に大正八年六月二十八日、講和條約調印に至るまで、滿五ヶ年經過して居ります。茲に暫く其の結果を研究して見ませう。

一、參戰國二十七國、八百乃至九百萬の人命を硝煙とし、二千萬の廢疾者を作り、十圓金貨を以て並べると二十萬餘里續くことの出来る三千八百億圓を消費して居ります。洵に空前の出來事であつて、恐らくは絶後といつてもよくありませう。

二、獨逸の軍兵主義心力主義が壞敗し、聯合國の全力主義人數主義が勝利を占めたのであります。將來人心に及ばず影響の是非は、果して如何でありますか。

三、獨・奧・匈・露・土國は、或は分裂し、或は萎微し、ポーツランド・チェツクス・ロウパツク・ユー

三、ゴーストラブ等の新興國を出しました。
 四、從來禍亂は、バルカン半島地域内に局限せられてゐる感がありましたが、今や禍亂のバチルスは、歐洲全上に擴張しまして、露の如き正直者は、側杖に破滅し、無謀な過激共產主義の雜草は、大に蔓延して來ました。
 五、基督教國民でないものを、劣等扱にして來たけれど、日露戦争に於て、幾分か彼等の迷夢は破れ、當度の大戰により、基督教國民が、必しも立派な行動をなさないのであるといふことを證明したのであります。
 六、獨逸の使賊により旺盛となつた過激主義は、露國に投げつけられた爆弾となつたが、其の投方が餘りに強烈であつた爲め、露國は勿論爆破したけれど、其餘勢は跳返つて、將に獨逸自身を焼かんとして居るのであります。
 七、空中及び水中に於ける横暴が、意外に強烈となり、毫も防壁の無い非戦闘の人と物こそ、無暗に殺戮消滅する蠻的行爲を生じました。
 之を要するに、此の大戦は、殆ど積極的に、何等世界文化の進展に貢献はしませぬ。唯獨り我帝國は、其の間異常の國權伸張と、國力膨脹とを見たのであります。兵器の戦争として、獨逸は世界の敵となつて敗北しましたが、我國は經濟外交の戦争に於て、殆ど世界を敵とせねばならぬ嫉視を、列強國に惹起したといつてもよいのであります。國民一統が、此の危険な將來に施すべき覺悟方策は果してどんなものがあるでありませうか。

講

演

柴田貴族院議員講演要旨

(大正七年十月二十一日講堂に於て)

赤木正一 連記

只今校長から御紹介を得ました通り、私が柴田家門でございます。此の前回即ち大正三年に此方に出ました際に、多少御面會を致した方もあると思ひます。が多分は初めて目に懸ることと思ひます。どうかお見知り置を願ひます。

只今御紹介中にもございましたやうに、私は當地平安湖の出生でございます。此の中學校の前身とも云ふべき明倫館の讀書場や、巴城學舎を経て、中學校の創設の初めまで在學致しました。そこで諸君とは、同窓の誼を持つて居る一人でございます。校長から何か皆さんに話をするやうにと云ふことでございましたが、常に此の學校の訓育の行届いて居ること、又諸君の御勵精になつて居ることも、既に聞き及んで居りますから、別段特に私から話致すやうな材料もございません。只滞在中奔走致します中に、或は得た感じでもあるならば申し上げたいと存じましたが、今お聞及の通り、殆ど寸刻の暇もなく歩いて居りますから、是をと言つて懸つた觀察を申上げる材料も持たぬや

うな次第でございます。校長から色々此の學校の諸君の、修養に對する方針等に就いても話を承りましたから、強いて私から申し上げることもないかと思ひますが、只私が比度参りましたことに就いて、若し假りに用向と云ふ名を付けて言ふならば、其の一は、只今校長よりお話のありました木戸公史蹟の調査、及び、傳記史料の蒐集、又一つは、縣下に於ける學校の視察とは申しませぬが、教職員其の方々のお話を承つて歸りたいと思ふことでございます。之が先づ用事とも云ふべき部類になるかと思ひますが、それで先づ其の用事とも云ふべき木戸公傳記編纂の爲に蒐集した史料の中にある事柄に就いて、お話しして見たいと思ひます。今度萩地に参りまして、特に深くおりました感想に就いて思ひ出したから、お話をしてお見たいと思ひます。

御承知の通り、萩は三百年前毛利家に據つて大なる一の都會を爲したのでございます。此萩地なるもの、大なる面目を上げたのは、毛利家の創設に由ること、存じます。故に古い歴史に就いて、毛利家以後の事に就いては、澤山の事實と材料とがあると存じます。私は明治三十年に、防長教育會の依頼を受けて、縣下を視察したことがございます。其の當時は、まだ中學校の分校であつたのでございます。其の位置は、只今の明倫小學の東に寄つた所でございました。是は私が教育を受けた處でございます。所で其處の倫理の教場に行きました時に、深く私は感じたことがあります。其の教場のホールにカント、ヘーゲルの倫理の説明材料が書いてあつたのでございます。此の倫理と云ふことも、修身と云ふことも、各自の修養を助ける一の科目であるのであります。所で私は先生に向つて、何故に萩にある學校で、カントやヘーゲルを説かなければならぬかと云ふ質問を發し

ました。出來得るならば、一週一時間の倫理の時間を、一箇月中のどの土曜日に合併せられたら宜からう。さうして校外へ出られたならば、萩地には倫理の材料を得る處は、澤山あるではなからうかと申ししたことがございます。私は自分の郷國を、只趣味を以て見ると云ふこと以外に、此の倫理教室たる萩地を遍歴すると云ふことは、親の墓に参り又史料の蒐集をして居ると云ふことのみでない。自分の修養上幾分の補を得たいと思つて参るのでございます。かゝる感を持つて居るのでありますから、一日か二日の餘裕があれば、大概方々へ参つて居ります。毛利家の祖先を祀つて居られる所や、松陰神社には、必ず参拜を致します。先日、松陰神社に詣りまして、多少所感がございます。是は此の席では申しませぬ。諸君も参りにあるならば、必ず何等かの感があるであらうと思ひます。かゝる次第でありますから、此の萩地の如き、到る所教室であり、到る所教場であると云ふ土地に於いて、諸君が修養をせられると云ふことは、教員諸君が非常なる御熱心を以て、諸君を指導啓發せられること、相待ちまして、諸君の無上の幸福であると信じて居るのでございます。只今申上げました此の前身の學校から、どう云ふ人が出て居るか、此の維新の源は、抑も誰の手に依つて成つたのでありますか、私どもが今日木戸公傳記の編纂をするに云ふことも、只單に物好きではない、世間にある如き營利的にやつて居る仕事でもありません。木戸公は最も早くから深く勤王の志を有つて居られたのであります。此の木戸公の傳記が出來ぬと云ふことは、甚だ遺憾であるといふことは、長く世間から考へて居られたことでございます。木戸公と政治的に深い縁故を持つて居られ、又一面門下生のやうな關係を持つて居られたのは、故伊藤公爵であ

ります。併ながら、諸君も御存じの通り、伊藤公と云ふ方は、非常に御用の多い人でありましたから、遂に存生中、木戸公の傳記に手を着けられなかつたのであります。そこで故桂公爵が、是非に此の事業をやりたいと云ふ意圖を抱かれたのであります。此の桂公は、伊藤公よりは、時代が少し後れて居りますが、矢張り木戸公の門下生と申しても宜しい間柄であります。併ながら、桂公は用務多端な爲に、此の事業に没頭することが出来ぬ。そこで私が木戸公に縁故を有つて居ると云ふ所から、私に代つてやつて呉れと云ふ桂公の希望に基きまして、遂に私が其の任に當つたのであります。斯く美しい此の事業でございませうから、桂公の没後に於ても、獨これに當つたのである。對する義務であるのみならず、逝ける防長の諸先輩に對しても亦此の防長の精神を、天下に知らせる爲めにも、好い機會と思ひますから、私の生命のあらん限、其の完成に努力せんと決心して居る次第でございませう。そこで確實なる史料を本として、之を編纂すると云ふことは、獨、木戸公の史傳と云ふのみにあらずして、寧ろ防長の勤王史蹟を闡明する所以であらうかと思ふのでございませう。此の感を持つて居りますから、私は此の仕事が矢張り防長の先輩に報い、間接には國家に貢獻する一端であらうと考へて居るのでございませう。そこで木戸公の政治的位階及び經歷に就いては、既に諸君は澤山御承知であらうと思ひますが、只今携帶して居ります史料の中に就いて、當時の人は如何に自分の子弟を見て居つたか、又時勢をどう云ふ工合に感して居つたかと云ふ事を知るに足る同公の書翰を、此處に一通持參致しました。之を朗讀した方が、諸君に深い印象を與へませうかと思ひますから、此處で朗讀致しますから、御清聴を煩はしたいと思ひます。此手紙の宛名の人は、

木戸勝三郎と云ふのであります。勝三郎と云ふ人は、どう云ふ人かと申しませうと、和田文讓と云ふ人の子でございませう。木戸公は和田昌景と云ふ人の子でございませう。和田文讓と云ふ人は、和田昌景の婿でございませう。木戸孝允公の爲には、義兄になつて居る。故に勝三郎は木戸公の甥である。木戸公が和田から出て桂を繼がれて居つたけれども、其の當時は相續人がないで祿を沒收せられるのでありますから、それが爲に掛替養子と云ふことをしたのであります。そこで木戸公が十五六歳の時に養子にせられたのでございませう。是は木戸公から其の勝三郎に送られた手紙でございませう。年は今一寸分りませぬが、多分文久元年か二年であらうと思ひます。其の手紙を一寸讀んで見ます。前略彌御無事に御出精珍重に存じ候、此方も無事に且々所勤候間御安意下さるべく候舊冬己來殊の外繁勤にて兎角御飛脚便にも書狀得出し申さす其中鳥渡御國へ罷り歸りたく存じ居候處何分にも時勢切迫兵端の起り候義實に今日も計難く則攘夷の義に就ては此度未曾有の御盛事にて過る十日。主上加茂下上社へ行幸若殿様も兵庫より召させられ御供奉の程誠に以て有り難き御事に存じ奉り候就ては義理の二字を尤厚く相心得私心を脱却致し鴻大の御高恩に報い奉り候事の心得實に肝要に御座候就ては其方も十五才を過ぎ候事故諸事自分の一見識は相立報恩の御心得晝夜御工夫第一に存じ候。○祖父様御法事八日には相濟み候事と存じ居申候孤山様御遠忌の事も申越され候處一體親類付系圖寫等もこれ有り候事に付其位の事は其方悉敷詮義致され候て御取計致さるべく候尤此度もよく承知致し居候得ば間暇の節は申越すべく候へども十二月御仕出の御書狀過る四日桑名の驛にて落手其後の御書狀は京着の上落手致し候位に付實に申越す間合もこれ無く候何分に

留守の事は丸九其方本人の積りにて萬事存分に御取計候て一向苦しからず候間諸事おは様ども御相談致され家事は何分用捨なく御處置致さるべく候毎毎も申進候通幾應にも御先祖様御年忌等成丈御町障に御執行致さるべく平生の事は省き候とも祖先の祭祀等は心に心を盡し候義實に孝道の一端にて人道の大切なる事に御座候間此事は決して御忘却これ無き様に存申候何分にもおは様によく御事へ成され候て内輪親睦肝要に存候

つまり之を見ますと、最早十五歳を過ぎて居るのに、自分と云ふことの了解が出来ぬことはなからうと云ふのであります。相當の見識も持つて居らなければならぬと云ふことが説いてあるのでございます。まだ外に少しございませぬが以下畧します。之が勝三郎へ宛てた手紙であります。勿論當時の時勢として、殊に國家の興廢と云ふことに就いて、深き感じを持つて居られたからでもありませうけれども、最早其方も十五の歳も過ぎたではないか。君國に對する報効の念を疎にしてはならぬ。又祖先を尊敬して家庭の取掃をしなければならぬと云ふことを説いて、國家に對する觀念と、家に對する觀念とに就いて、懇諭されたのであります。で木戸公は何時も斯る思想を抱いて居らるゝことは、澤山の書面中に歴史として見ることが出来るのであります。木戸公は今日に於ても念頭を去ることの出来ぬ忠誠比類なき大政治家でございます。さうして此人は諸君の居られる此學校の前身に在學して居られたのでございます。それから能く諸君の御承知の高杉東行先生も、矢張さうでございます。勿論神に近き忠君愛國の思想の權化であつた吉田松陰先生の薫陶を受けられたことはもとよりであります。矢張此學校の前身に居られた人でございます。諸君は斯る歴史あり斯る光

輝ある此學校に學ばれて、而して此の木戸公の言はれた如き觀念を充分に持たれぬと云ふことであつたならば、是は殆ど此學校を侮辱するものであらうと考へます。私も矢張諸君と同窓でございますが、今日と雖も此の萩地を以て、一の修身教場と思つて居るのであります。私は生命のある限り、修養を怠らぬ積りである。今日は私が當地に参りました用事に關聯して、得ました所の材料に就き、所感を申上げた次第でございますが、諸君の御参考になりますれば、幸であるかと考へるのであります。古人先輩の偉大な言行には、澤山の教材もありませうが、只今は私の此度旅行に關して想起しましたことだけを御披露申して置きたいと思ひます。尙重ねて申し上げますが、此の歴史あり光輝ある此の土地此の學校で、教育を受けられる諸君は、將來國家の一人として、此の國家の爲に充分なる報効の義務を果されんことを切に願つて止まぬのであります。何卒諸君は、將來萩出身の者であること云ふことに背かぬやうに修養を續けられんことを、偏に希望致す次第でございます。

(終)

(因に本講演者たる貴族院議員從三位勳一等采田家門氏は、腸澀血の爲、本年八月二十五日俄然薨去せられたり。氏は明治二十三年帝大英法科を卒へて仕官せられ、三十一年山縣内閣成るや、内務省地方局長に擧げられ、次ぎて桂内閣に内閣輪長として手腕を揮へり。而して第二次桂内閣成るに及び、入りて文部大臣たりしは人の知る所なり。又氏は深く郷黨を愛して、熱心に後進を引立て、防長教育會にも多年盡力して、本縣教育の爲に計畫せらるる所多かりしに、惜しいかな天之に年を假さず、吾等は茲に有力なる一先輩を失ひて、泰山頽れ、梁木壞るる嘆なくんばあらず。(噫) (編輯子誌す)

文學博士渡邊世祐氏講演要旨

(大正八年十月八日講堂に於て)

岸 新一 筆記
阿 部 芳 甫

私の本籍は萩に在りますが、維新の際山口に引越したので、私の出生地は山口であります。それで私は山口縣人の一人として、山口及び萩には大關係があるのであります。私は山口中學校から山口高等學校に入りました。岩田校長とは高等學校時代から交際して居ました。東京の帝大の英文科を修められる時には、同じ所に居りました。こういう關係から年來色々お世話になつて居ます。私は山口縣人でこれから世に出で活動せんとする方の爲に、先輩の方方と譲り、及ばすながら、諸君の爲、山口縣の爲に、善かれかしと祈つて居る一人であります。所が大正五年度に於ける本校の成績を見ますと、縣下の他の中學校に比して、餘り良くない成績でありました。我々の良かれかしと思つて居る學校が、良くない成績であるとは誠に遺憾であります。どうかして良くしたいものと、先輩とも話して居ります。昔は防長を中心として種種の英才が輩出した所でありました。然るに今日は状態が變つて、本校が縣内の各中に比して遜色のあるのは何故でありませうか。これには色々な原因があらうと思ひますが、しかしこれは一時的の現象であつて、やがては良い結果を齎すことであらうと思ひます。私は餘り當地には歸りませんので、當地の状況をよくも知りませんが、この學校が最上に居なければなりぬと云ふのに、今申した通り劣等に居るのは如何なる理由によるのか

と、日頃から考へて居るのでありますが、これを一般的にいふならば當地は地理上不利なる所で、自然が此の如き成績を齎らすに至つたものではありますまいか。當地は誠に天然の利を受けて、恰も一つの樂園で小桃源をなして居ると思はれます。嘗て私は鎌倉の師範學校に行つて、此處は史料を研究する所ではあるが、子弟を教養する所ではないと話をしました。これと同様に、此處は樂園地であるから、自然が人文の上に影響を與へて、割合不利をなすかと思はれます。しかし、維新の際多數の英傑を輩出したのを見れば、何かろくに自然に打勝つものがあつたでありませう。今日の社會状態は、東は亞米利加西は支那と輪廓を争うて居る。然るに當地は全く活社會と隔絶して、活動せし人の静に餘命を送る様な所であるから、土地の人が悠長で概して活氣に乏しくあります。これを縣下の他中學に比較するに、豊浦に於ては、下關を目標の間に控へ、沖を見渡せば大きな外國船が始終往來して居る。山口に於ては縣廳及び高等商業學校があり、又近く高等學校も設立せられる等、外界の刺戟物が豊富でありますから、學生の氣風が自ら違つて居ます。他の徳山・岩國・周陽等に於ても同様であります。これらの點が他中學と相違するので、當地の學生に悠長なる性質を造る様になつた理由であります。しかし、悠長でのんびりした性質は、必ずしも悪いとは云はれませぬ。一面に於ては又必要であります。私は嘗て東京府立第一中學校に行つて見ましたが、かしの生徒には、も少し性質が悠長で強健な体格の者がほしひのであります。これは一中の様な激烈な刺戟のある所では必要ですが、餘り悠長になり過ぎることは、こゝの様な樂園に於ては、却て悪い結果を惹起すかと考へられます。さて當地の學生の風は、他の田舎の中學と同様に、此の地方の

最高學府の生徒であると考へて居ります。此は誠に思ひべき考であります。此土地としては己むを得ないことで、さうなれば學生の氣風は大人らしくなつてくるのであります。即ち早く老成しませ成熟します。此うなると大事な修養時代を無意味に終るのであります。私どもが山口高等學校に在る時もさういふ傾がありました。府立一中の生徒は無邪氣で街ふ所がなく、其の眞面目を表はして居ります。第一高等學校の生徒は、不羈磊落であります。不羈磊落といふ事は、必ずしも絶對に學生に必要ではありません。しかし早く老成し成熟するよりもよいと思はれます。第一高等學校の生徒がこのやうであるから、府立第一、第二、第三中學校の生徒の氣風も、皆そのやうに化して行くのであります。こちらに於ては、皆さんが學生の風を作るのであります。その諸君が老成早熟の風があつてはなりません。十分に無邪氣で子供らしくなくてはいけません。私がかう云ふと老人の中には反對するものもあります。昔品川さんが天下の事を論せられたのは、僅か十三歳の時であつたといふが、それは時勢が違ふからであります。今日は秩序ある社會でありまして、中學、専門の學識がなくては、世に處することは出来ませぬ。秩序ある世に處しては、秩序ある態度を取らなければなりません。さうして諸君は、子供らしくして、如何なる智識も之を涵養する様に心懸けねばなりません。かういふ理で、地勢上の關係なり、又實社會の關係なりで、學生の氣風が成熟するので、かような悪成績を齎したのであると思はれます。これが一般的の理由であつて、其の他にも仔細な理由もありませうが、私にはさう思はれます。されば此の一般的の理由を教済するには、如何にすべきか。此の第一方法として、諸君は宜しく運動して、身軀を鍛練しなければなりません。凡そ

健全なる精神は健全なる身體に宿るものであつて、すべての根據は身體にあります。それで諸君は、運動によつて心身共に澆潤たる學生として、よい結果を齎し此の天然の不利を補ふやうにせねばなりません。さて運動が競技に走るといふことはよくないのであります。競技といふ事は、手段としては悪しくはないが、それが運動の目的ではありません。運動の目的は、自己の心身の健全を計るのにあります。故に目的と手段とを誤つてはなりません。特に私は三年以下の方に向つて、十分に規則正しく運動して、身體を作る様に注意せられん事を望みます。就中一年二年の間に於て、十分心身の鍛練をするといふことが大切であります。立派な心身を基礎として、三年以上の學問に資せねばなりません。三年以上になりますと、學科は益繁多になりますから、資本が十分でなければ何にも出来ませぬ。凡そ人間心理の發達状態を云ふと、其の記憶力は、八歳より漸次進んで、二十一歳頃までが一番強く、それから徐徐として衰へるといふことが、近年獨逸に於て研究せられた人間の心理状態であります。それで一二年の間に運動を勵み、校長の施設の下に十分活動せられんことを望みます。これと同時に又成るべく外界と接觸せられる機會の多からんことを望みます。……此の頃は父兄の負擔も大でありますから是非にとは云ひませんが……特に下關等の如き敏活なる状態を見られて、自己の頭に何か或物を得るといふ事は必要であります。直接にこれぞといふ利益はなくても、將來に於て何か利益を齎するのであります。暑中休暇などの如く、暇ある時に、旅行せらるゝなら、空空寂寂と無意味に物を見ない様に、務めて精密な研究をすることが必要であります。次に大人振るといふことが大禁物であります。田舎は早くから大抵大人振るものである。

父の代理などをして世間的仕事に接觸するのが原因であります。さうすると柔軟な頭腦となることは出来ませぬ。頭が堅くなるも何の役にも立ちませんから、柔軟な頭を作つて何でも受入れる様にならねばならぬ。柔軟な頭を作るといふことは、此の地方に於ては困難でありませうが、必掛一つでは實行せられぬこともありませぬ。かく地理上の不利と、外界の接觸が無いのと、學生の風が老成振つてゐるとの理由の爲に、此地の學生は不利な地位にあるから、何卒校長其他の諸先生指導の下に、諸君は此の弊風を打破して、一面目を發揮せられんことを切望します。諸君の前途には困難な嶮阻が横はると同時に、又光明が輝いて居るのであります。進めば如何なる所へも到達することが出来ませぬ。山口にも六月から高等學校も出来るし、又陸海軍にも色色先輩が盡力されるし、近く勝木大佐も來航せられるのでありませう。此の度軍艦が萩に寄港すると云ふのも、山口縣から出た下士水兵が、皆強健で模範的であるから、一層海軍思想を奨励せん爲の目的であります。これなどは外界と接觸する好機會でありますから、十分觀覽せられて不明の所があらば、詳しく聞かれたら、大に利益する所があらうと思ひます。かく先輩が諸君の前途を考へて、一人前でも立派な人を出さんと努めて居られませぬから、諸君の前途には、一つの光明が輝いてゐるのであります。諸君は此の光明に向つて、遺憾なく學生たる本分を盡して、其の光明に達せられんことを切望します。

霧島艦長勝木大佐講演要旨

(大正八年四月十一日講堂に於て)

赤川 傳 筆記
尾木 忠 夫

私は、唯今、校長殿より御照會になりました勝木源次郎であります。幼少の時、江向小學校や、明倫小學校で学びました。出郷以來、郷里へ二三回も歸りましたが、職務の爲め歸りましたのは、今回が初であります。就いては、校長殿より何か話せよとの事でありませぬ。自分は、諸君より一日の長であるから、話すべき義務を有して居りませぬ。されば、平素よりの考を少し話させませう。久し振に郷里に歸れば、「山川草木、悉く知己でないものはありませぬ。歩行の際、目に入る物は、皆昔時の知己であります。昨日、亡父の墓參をしましたが、言ふ能はざる感に打たれました。人は皆郷里を愛します。郷里を愛する念は、やがて國家を愛する念であります。又郷里を思ふ心は、或點に於ては、共同一致と云ふ事になります。由來、山口縣人は、共同一致の念に乏しいと云ふ事を、よく話に聞きますが、此の點は、諸君の一考を煩したのであります。昔話に、跛と盲目とが居たが、火事の時に、跛は盲目に負れて、指圖しつつ、兩人とも、無事に逃れる事が出来たと云ふことがあります。彼等は、よく共同の事業をなしたのであります。一林、人間は、各自の能力を盡く發揮するは難しい。されど各自其の長所を表すは、いと易いことであります。されば、諸君は、毎日、學校に於て校長其他の諸先生の指導に依り、各々長所を發揮し共同して事を爲せば、其の力は大きな

り、之に反して、各自相異なる能力に依り、思ふが儘になさば、何の効力も無いのであります。若し、
歐洲戦争講和會議の結果、悪しき意味に於て、日本に此の影響來らんか、吾人は一層共同一致せね
ばならぬのであります。諸君は、今後、如何なる方面に向はるるも、ろは各自の自由であるが、ど
うか奮勵努力して、成功して貰ひたいのであります。

私は、先刻、校長殿の話を如く、兄が陸軍の方に居ますので、幼心にも、自分も、海軍軍人とな
りたいと思つて居ました。或時、今日のように、軍艦が寄港し、上陸せる水兵の姿の雄雄しきを見、
軍樂隊の奏する音楽の面白き調を聞いて、愈々海軍に志す決心を固めました。諸君も此の度軍艦を
觀られて、定めて發奮せられた事と思ひます。榛名、比叡、霧島と金剛とを合せて、近年盛に世人
の謂ふ所の、八四艦隊の四を造り、又戰艦、山城、伊勢、日向などで八を造るのであります。將來
はいざ知らず、今日の日本の艦隊では、これが一番強いのであります。世界各國何處に乗り出して
も、ちつとも恥しからぬ艦であります。

昨日は、天氣が悪しきにも拘はらず、軍艦を觀覽せられ、其の上二三名負傷せられたのは、氣の毒
でした。諸君は、これか爲め、海上生活は、不愉快であると思ふかも知らぬが、我我は、長距離の
航海をもし、永年海軍に従事して居るが、昨日の如き困難は、幾度もある。あの位の困難にへこた
れる様な者は、駄目である。非常なる困難を経ぬものは、成功することは出来ぬ、世の中の如何な
る事も、皆困難に依らねばならぬのである。諺にも、「艱難汝を玉にす」と云ふことがあります。仕
事と云ふものは、外見は楽しい様でも、内實は苦しいものであります。成功せんとする者は、大に

苦まねばなりません。神は我々の力を試みる爲に、困難を與へられるのであります。茲は御維新の
時に、多くの偉人を出したことは、諸君のよく知れる所であります。されば諸君は、此等の先輩に
對しても、日々努力をせねばなりません。一體當地は諸君を刺戟する者に乏しい。此の點は實に遺
憾であるが、されど昔よりの偉人は、悉く自ら發奮したのである。英傑の士は文王なしといへども
興起するのであります。されば諸君も、大に憤を發して、先輩の名譽を保ち他に負けぬやうに各自
の責任を盡さねばなりません。之に關しては、よく校長其の他諸先生方の指導に従ひ、一心に勉強
することが必要であります。

さて以上話した事柄は、自分とても一々之を實行することは甚だ難しいが、しかし私もかく話した
以上は、之を實行することに努力する者であります。で之を實行する約束を、今諸君といたしませ
う。諸君も異存なくば實行して下さい。「言ふは易く行ふは難し」で、彼のイソツア物語の中に、蟹
の話があるが、「母親が子に、真直に歩めと命令し、さて、自分で實行して見れば出来ぬ」といふの
である。これは、「言ふは易く行ふは難し」と云ふ事を表せる良き教訓であります。互に約束して一
つ奮發しようではありませんか。

上山貴族院議員講演要旨

(大正八年五月二十六日講堂に於て)

松屋初五郎 政筆記
山縣

私は、大正二年十月の三日か四日か印に、當地に來たことがあります。數へて見ますと足掛け七年になります。勿論其の當時の生徒は、當校には一人も居らないのでありますが、しかし、其の時私は明倫小學校を參觀しましたから、知つて居る人もあるかも知れませぬ。其の當時は村上校長の時代であつた。其の時の状況と今のを比較してお話するとよいと思ひますが、年所を經過して居るので記憶も薄らぎ、思ひ出されぬ所が多いので、遺憾ながら出來ませぬ。但し具體的には比較は出來ぬけれども、段段進歩して居る様に思はれて、今日は甚だ愉快を感じて、此の壇上に立ちました。思ふに此の學校の前途は甚だ遠慮であつて、今日の狀態に満足することは出來ませぬ。諸君が先生の教を守るのには諸君の本分であつて、又日本國民として忠君愛國の務を全うする所以であります。どうぞ諸君の益々奮勵せられんことを望む。私は色々の關係から學校は喜んで參觀するが、しかし、教育には門外漢であるから、只、素人論としてお話して見ようと思ひます。一体學問は何の爲にするのであるか。私の考では、日本國民のする學問は、忠君愛國の爲にするより外はないと思ひます。修身の學問が、其の第一の目的たるは云ふまでもない事で、直接に關係ない學科でも、其の目的は此の中心たる忠君愛國より外はないのであります。若し此の忠君愛國を目的とせずば、

くら學問は進歩することも、何の用をも爲さないものであります。否むしる世の害になるのであります。私は明治二十八年大學を卒業し、其年青森縣に參事官として赴任したのであります。故人の品川子爵は、在學中より種々お世話になり誠に有難い教訓を受けて居ました。其の關係から、赴任せんとする時、子爵の邸に暇乞に出で、色々守るべき訓辭を受けたのであります。其の中に、松陰先生の松下村塾記中の「學、學以爲人也」と云ふ語がありました。其時はあまり注意しなかつたが、次第々々に此の言葉が、學問の中心点を示されたものであると云ふことと悟りました。各學科何でもかでも中心に向つてやつて來ると云ふことがなくてはならぬと思ひます。日本國民は、忠君愛國を中心とし目標として行かねばならぬ。思ふに校長始め諸先生方も此の素人論には御同意でありませう。此の意味に於て教育を受けられる諸君は、多大の便宜を得られて居る。即ち防長二州は藩主の朝廷に盡された心の厚かつたこと、愛國の士の雲の如く輩出したことであります。之に加ふるに山河の美は諸君の血を清め心を慰めるに多大の効果があります。何卒、校長先生を始め諸先生方の教訓を守つて、國家に盡す覺悟をして貰ひたい。今や世界の大戦の人心に與へた影響は多大である。往々人心の平衡を失ふことがあります。此の時に當つて、學問する人の心掛は、非常に大切である。又今回山口に高等學校が設けられたが、此の高等學校を立派に發達させる任務も、亦直接間接に諸君の雙肩に掛つて居る。さて孟子に「楚の言葉を教へ様として齊の地に入れて置ては如何に鞭撻しても楚語を覺ゆる事は出來ぬ」と云ふことがある。これは、人は四圍の状況に支配せられるものであると云ふ意味と思ひます。諸君は訓練の點に於ては、非常に立派な四圍の状況に支

配せられて居るが、又奮勵努力するには極めて不利益な状況に支配せられて居ることも考へねばなりませぬ、一言にて云へば外界の刺戟がない。武陵桃源とはいはぬが、縣下の他に比して非常に刺戟が乏しい。大都會には周囲の刺戟の絶えることがない。それには又多くの弊害も伴つて居る。私には河處までも教育は田舎で施すことを理想として居る、しかしながら、周囲の刺戟のない不利益は補をつける必要がある。これは諸君の考へ次第で如何様にもなることであらうと思はれる。即ち諸君は自ら刺戟を作ること考へねばならぬ。然らざれば社會に出て敗れるかも知れぬ。諸君の直ぐ隣には立派な學校があつてそれに負けぬ様な心掛で奮發しなければならぬ。察するに諸君は四圍の事状によりのんびりした勉強をして居ないかと思ふ。當るか當らぬかは知らぬが多分そうではあるまいか。充分豫習復習に力を込めてやらなければならぬと思ひます。もしゆつくり授業を參觀することが出来たら、私の考を實例を擧げて證明し得たかも知れぬが、都合あつてくれも出来ぬ。先刻授業を參觀した時も、豫習復習の足らぬ者があつたようである。しかしこれは悉く私の推量であるから間違つてゐたら何分御免を被りたい。が志だけは解して貰ひたい。之を要するに、諸君は訓練を受けるには便宜があるが、四圍の事状が諸君を鞭撻するに足らぬから、諸君は自ら刺戟を作つて其の不利益を補はなくてはならぬのであります。今後熱心に校長先生を始め諸先生の指導を受け益々勉強せられんことを希望します。此の次に來る時は七年前に比較して今日進歩して居る如く、亦私を喜ばして戴きたいのであります。

文苑

學生と實力養成

第五學年 市川 恆雄

古は、無學鈍才ながらも、幸に世人の恩恵の下に、生活を營み居りし聲も、機に乗じて、一朝に、身を高位高官に昇せ、其富は積んで山を成し、衆人羨望の的となるものありき。現時代は之と異り、社會の秩序整然として、如何なる事業と雖も、實力に依るに非ずんば、決して、成功する能はず。故に實力なきものは、機倖にして、一時成功するが如きも、最後は、必ず失敗に終り、世人の侮蔑嘲笑を受くべし。特に、競争激烈なる學生社會は、決して實力なきものを容れざるべし。若し學生にして實力なからんか、學校に於ては、假令一時の糊塗稍功を奏すとも、卒業後、上級學校の選抜試験に於て、失敗の悲運を齎すべし。要するに、機倖の成功は、己を欺き、人を欺き、世を欺くものなるが故に、社會の活動場裏に出づれば、自ら其馬脚を露し、忽ち、落伍の人となるべし。嗚呼實力養成の必要、亦大なるかな。社會に貢獻すべき大事業を爲さんの抱負を有するものは、宜しく實力を養成し、平素より、其計畫を立つべきなり。之を古の歴史に見るに、伊尹大公樂毅孔明等の王伯の略も、皆賦畀の中に定れるものにして、仕官の後始め

て之を計りしには非ず。然るに、近時の學生、多くは、平素實力の養成を閑却し、試験前には、暈に夜を徹して勉強し、しかも、尙其成績は甚だ劣悪なり。是れ適に以て其身の健康を害するに足る。豈其他を言ふに遑あらんや。然らば、之を養成するには如何なる手段を取るべきか。曰く、唯日々の課程を實着に勉強して怠らざれば可なり。されど、是れ意志薄弱なるものには、容易の事にあらず。故に、吾人は平素意志の鍛錬に心掛けざるべからず。禪家の警語に曰く、「日日の行事は是佛祖の行事なり。」と、是こそ、實力養成の秘訣とも云ふべきか。

成功せんとするものは須らく志を立つべし

第五學年 藤永 絡

學に志すものは、聖人たらんとする大志を立つべし。然らずんば學成る日なけん。夫眞に能く聖人たらんとする大志を立て得ば、一切卑劣の情念は皆自ら解け去るべきなり。もし同窓の友人にして、發起するもの七八人なる時は、我も亦發起して自ら咎めず。同年輩の友人にして飲酒放蕩なるもの八九人なる時は、我も亦放蕩して自ら責めざるは、中等の天資を有する者の常なり。それ中等の天資を有する者は、自ら奮はば、上は聖賢の域に至るべく、自ら萎てば、下庸愚の列に墮つべし。されば、この種の人は、是非善惡を識別する能力

なきにはあらざれども、未だ必ずしも是にして善なるものを取る能はず、また未だ必ずしも非にして悪なるものと捨つる能はず、知らず識らず俗に随ひ非に習ひ、終に尋常一徳の俗頭俗腦凡情の人となりたり、聖賢の域にも到り得べき天資を抱きつゝ、庸愚の列に入り草萊と共に朽つ。あに悲むべき事にはあらずや。抑も所謂上智と下愚とは暫く論せず。移つて上るべく下るべき中等の天資を抱けるもの、誠に聖賢ならんとする志を立て、痛切に學を爲したらんには、いかでか、其功なかるべき。志を立つるに、「我敢て聖賢を希はず。小人たらざるを得ば足れり。」といふが如きは、その言謙退の美あるに似て、然もその氣象の福小なるは憐むべく、厭ふべし。志を立てるには必ず極大極高ならざるべからず。志は心の極的なり。その標的にして極大極高ならざるべからず、必ずや輕忽慢易の意生じ、敬虔誠實の情乏しきを免れざらん。輕忽慢易の意一たび生ずれば、一局の基猶且敗る。況んやその他をや。故に商となり、工となり、農となり、官となる、人の志すと、こゝろ一途ならずと雖、要するに皆その好むところの第一等の人ならんことを希求すべきなり。抑々聖賢は鬼神にあらざる。只其人酔乎とし酔なる故に尊きなり。聖賢も人なり。我も亦人なり。その人たるに於ては、聖賢も猶我の如く、我も亦は聖賢の如し。只我は猶未だ彼の如くに酔ならずして、渣滓甚だ多く、色香美ならず、氣味純ならざるのみ。必ずしも全く彼と相異なるにはあらず。もし我の聖賢に同じき所以のものを擴充す

れば、我即ち聖賢たらん。舜何人ぞや。我何人ぞや。宇宙あり我が聖賢と共に相携へて同じく行くを妨げんや。この心を失はざるを大丈夫といふ。爲すあらんと欲するものは須く大丈夫の志を立つべし。

學生の本分

第四學年 石津有恒

歐洲大戰亂、漸くその局を結び、平和の曙光は、全世界に輝き渡る時とはなれり。激進思想、奢侈の風、漸く擴まらむとする今日、學生たる者の盡すべき義務は、愈々重大となれり。抑も吾等學生の本分とは如何。曰く、士たるの道を行ふに在り。その方法如何。曰く、教育勸語の御趣旨を奉體するに在り。畏くも、明治廿二年十月三十日、明治大帝は、教育の振興を圖り、學生たる者の本分を明にせむとて、この千古不磨の金科玉條を發布せしめ給ひしなり。然るに、時勢の遷るに隨ひ、學生にして漸く御趣旨に遠ざからむとする傾向を生ずるに至れり。嗚かほしきの極ならずや。彼の世界統一を理想とせしドイツの學生を見よ。我が學生は彼に比して果して遜色なきか。十分その本分を盡せりや、否や。願みて聊か羞つる色無き能はず。豈に力めざるべけむや。畏き御詔勅を下させ給ひし聖帝の御旨を奉じて、團體の精華を發揮すること、實に吾人の義務なれ。この義務を盡すは、即ち、學生の本分を守る所以なり。夫れ眞勇は、善行を守り、悪行を却く。されば、

本分を盡さんと欲する者は、必ず、先づ勇を涵養せざるべからず。今後、世界は平和的競爭、愈劇甚たらむとし、諸惡習、愈擴らむとす。吾人學生たる者は、須く眞の勇氣を養ひ以て、その本分を盡し、明治大帝の御旨に答へ、大正聖代の御惠に報い奉らずして可ならむや。

漫言 四則

第四學年 梶山武夫

一、釋迦とクリスト

クリストは、樂天派を代表せる偉人にして、釋迦は悲觀派を代表せる偉人なり。即ち吾人が兩偉人の神像に對する、隨喜の涙の常に、前者に充ち、悲哀の涙の常に、後者に滿てるを見る。然り而して樂天は、悲觀の一轉面なることを忘るべからず。

二、生と死

等しく是れ一種の桶なり。やゝ深ければ之を棺となし、淺ければ即ち盥といふ。あゝ人は此の桶に生れて、彼の桶に眠らむとするか。思へば生は淺薄にして死は深遠なるものかな。

三、人傑

そも、高才達士とは、如何なるものを指して云ふ乎。曰く品性高尙にして識見一世を曠しうし、氣宇瀟灑にして人を容るゝに吝ならず、剛直果斷潔淨なるものなり。約言すれば、體大心小智圓行方の四徳を具備せるもの、即ち是れなり。

四、天才と性辯

大いなる性辯は大いなる天才の影なり。若し夫れ吾人にして、大いなる性辯なくんば、それは凡俗の徒のみ。實體に應じて影亦た大ならざるべからず。而して天帝は、人類の各方面に互りて天才を下せり。しかも其の性辯を排けむとする者あらば、そは天才を拒絶せるものと言ふべし。マホソット曰く、駭ろ山が其の位置を變するを信ぜよ。人がその性辯を變するを信する勿れと。言稍や奇矯なりと雖も、亦以て戲味一番すべきものならむ。

海 國 民

第三學年 坂 一 雄

我が大日本帝國は、亞細亞大陸の東岸、太平洋の西方に横る無數の島國より成れる海國なり。されば、我が國人は、何れの方面へ行くとも、烟波蒼茫の海洋を望まざるはなし。由來、我が國人は、島國根性を有する人民と嘲笑せらる。而して、我が國人中には、或は大に之を恥ぢ、力めて大陸的體度を持せざるべからずと云ふものあり。然れども退いて考ふるに、島國根性は、海事思想に富めるを證する者。何ぞ恥づるを要せんや。むしろ誇るに足べきものなり。故に我等は、益々海事思想を養はざるべからず。島國根性を發揮せざるべからず。以て海國として成功すべきなり。抑、我が國が海國として早く發達せざりしは、徳川氏三百年の鎖國政策が、國民の海外

經營心を銷沈せしめしに因る。我が國民は、本來男田の國民にあらず。退嬰的國民にあらず。機に乗すべきあらば、海外に雄飛して、大志を伸べんことを期して止まざりき。鏖屋五兵衛、高田屋嘉兵衛、濱田彌兵衛、山田長政、近藤重藏の如き幾多海上の英雄の、其の間に崛起せる、以て其の一斑を觀るべきなり。されば我が國民は、大に海と視み、船舶を家となし、海上を他國民の蹂躪に委ねざるの覺悟なかるべからず。嗚呼我が國民は、雄飛を欲する國民なり。進取の氣象に富める國民なり。碌碌として槽檻の間に耕死すべきにあらず。須らく慨然として躍起し、大に海國男子の本領を發揮すべきなり。

希望

第三學年 原 吉雄

嗚呼希望なるかな。人生は希望あるに因りて始めて意義あり。人は希望あるに因りて活動し發展す。希望は人生に光明を與ふ。人生の行路常に平坦ならず。萬丈の絶壁忽ち我が前途を妨げん時、吾人は何によりてか此の難關を突破せん。希望を有せざるものは、忽ち挫折して、復び立つの勇氣を失はん。希望を有するものは、禍を轉じて福となすこと難からず。希望は大なる慰藉者なり。指導者なり。活動、進歩、發展、これ青年の生命なり。而して發展は進歩に待たざるべからず。進歩は活動によらざるべからず。活動は希

望に求めざるべからず。青年にして希望を有せずんば、それは己に青年たるの資格を失へるなり。青年は洋洋たる希望に富む。史を繰きて之を窺はんか。史上に活躍して、世上の文明を革新せしめたるは青年なり。そは青年が有したる希望を、實現したるに外ならず。希望の實現は、實に男子の本領とする所。吾人は須らく向上の一路に突進すべきなり。古人曰く、精神一到何事不成と、至言と謂ふべし。

途上の所感

第二學年 服部達太郎

余、一日父の命にて將に深川に至らんとす。時に、炎雲天に漲つて熱風を起し、草木の枝葉垂垂して力なく、満目の風物醉へるが如く、眠れるが如し。偶々路傍に一農夫を見る。僅に一葉の竹笠もて頭を覆ひ、一襲の短衣もて身を纏ひ、水は熱して湯の如き水田の中に入り、流汗玉をなすも厭はず。勤勞す。この農夫の辛苦果して如何ぞや。此を彼の緩羅もて身を飾り、出でては、數町の行程も車を馳せ、入りては、美酒美酒に飽き、婢僕を使ひ、悠々閑々、一事一業もなすなく、徒に日月を空費する逸遊者と比ぶれば、其境遇雲泥の差あり。嗚呼、農夫の勤勞辛苦、實に思ふべし。然れども此の辛苦は他日收穫の秋に當り、無上の幸となること明なり。逸遊者の樂み、實に思ふべし。然れども、騙る者は久しからず。異日困苦

に陥るや必せり。

農夫の辛苦は一變して無上の幸福となり、奢侈の樂は一變して困苦となる。嘉すべきは農夫の勤勞。誦むべきは奢侈逸遊なり。と、余獨り思ひて、慨歎に堪へざるなり。我等學生は、すべからず、この農夫の勤勞辛苦に倣ふべきなり。我等が今日の苦學精勵は、他日學成り、社會に立つ無上の幸福となるや必然なり。勤勞辛苦の結果は幸福なることを痛切に感じ、後の備忘とす。

吾人の責任

第二學年 吉村恒助

歐洲の大禍亂も終を告げて世界の平和は來た。文明は戦争によつて進歩する。此度の大亂に於ては驚くべきものが多々ある。特に航空機潜行艇などの武器はさうである。歐米各國では武器に限らず總ての事物がすん／＼進歩してゐる。今獨逸の國內は大に亂れてゐるが、五年間、世界の列強國と相對して、よく攻守したことは感すべきである。我國の文物、大和魂と獨逸の文物獨逸魂とを比較して考へてみると優つてゐるところもあらうが、また危まるる點が多々ないでもない。戦争開始以來、各國は輸出品を制限したので、我國は一時大混亂を來たし、物價は騰貴した。實に情なく感じた。其上露獨の革命が生んだ危險思想は、漸次世界に波及して、我國の思想界までも怯かしてゐる。然し我國の國體は萬國に比類を見

ない。隨つて國民の思想も萬國に比類がないものでなければならぬ。よつて今後吾々は外來思想に化せられず、この比類のない皇國の思想をもつて、遠く海外に殖民地を開き、文物諸般、世界の平和の戦争に後れを取らぬやうに、努めればならぬ。この任に當る者は、吾々現代及將來の青年の外、他には無い。吾々の責任は大と言はねばならぬ。

最も快なりしこと

第一學年 井町 勇

波靜かなるべしと思ひて、友達數人打連れて、出でたる磯の、案に違へる大荒波。さればとて、かゝる意外は、北海の常なれば、今更、退かんは勇氣無しとて、そのまゝ、岩頭に立ちて釣を垂る。誰一人未だ一尾も釣り得ざるに、數回の大浪打かかりて、全身既にづぶぬれとなり、顔をさへ悉くさらはれぬ。「かゝる有様にては、さゝぬ取るにも由無し。いで歸らん」と、獎むる友も有りたるを制し、「今日こそ、海國男子の本領を發揮せん」と、何れも高き岩角に、着物をぬぎ捨て、大波の稍々ひるむ其の暇に、さんぶ／＼と飛込めば、我も後れじと飛び込む。押されては突返され、突返されては押出さるゝを、押切り突切り、やう／＼にして、目ざす沖の岩に著々ぬ。顯みれば、友は皆既に陸に在りて、私の歸るを待てり。直ちに引返さんとせしに、折しも、猛り立つたる怒濤は、さながら、板片の如く我身を弄びて、水上を再び三度轉ぶと思ふ間無く、

身は早や岸に近し。喜びて、上らんとすれば、波は我を奪ひて去りぬ。波のほに乗りては、高く天上に上るよと思へば、忽ち、奈落の底に引込まれ、覆ひかぶる大波を、突切らんとすれど、手足疲れて、意の如くならず。拔手を切りて、進まんとすれども、波荒くして進まれません。或はあやふく、岩に中りて、碎くる所を逃れ、或は、引込まれて、水底の藻屑とならんとするを、辛うじて助かる等、数回の危険に、傷だに受けず、遂に陸に上るを得たり。

あゝ、危かりき。あゝ、恐しかりき。然れども、余は死せざりき。負傷もせざりき。今にして之を思へば、血湧き肉躍るの感なしとせず。あゝ、萬里の波濤を踏破りて、何時か我手に、海の寶庫を開かんかな。

秋の田

第一學年 杉 丙三

山にも野にも秋とつれて、木の葉も漸く色づきそめぬ。そよそよと吹き渡る涼風は、見渡す限りの稻田に、黄金の波をよせ、やがて我が襟元に吹入りて心地よし。鳴子に驚かされて、群雀の飛び去れる彼方のあせ道に、一心に寫生する人あり。村の小供等の物めづらしげに集れるも見ゆ。鳥の群のガアガアと、かまびすしく鳴きながら岡の柿の木の方へ飛び行くは、熟柿を味ひてにや。此處彼處のわけてたる如く見ゆるは、早稲の刈り取られたるなり。數多の農夫は諸所に散在

して、苺のもの、たばぬるもの、運ぶもの、いつれもみな瑞穂國の平和にして、豊かなる様ならぬはなし。かの山と、野と、田と、里とをたづねられて、ゆるく流るゝ清き阿武の河水にも、秋のづから秋の色浮び出て、面白し。

修學旅行記

第四學年 岸田隆吉
山縣 政

五月十二日、月曜日、

我等第四學年生約八十名は、元重、田總、相島三先生に引卒せられて、修學の爲、吳方面へと出て立つ。今日を其第一日とす。この日や陰雲濤々として四山を閉ざし細雨々々として止むべしとも見えず。八時登校。一同昇堂し、校長より旅行に就きての一場の訓話ありたり。訓話終るや、各自歸宅して、旅行の準備に急ぐ。はきなれぬ草鞋を引づりて、豫て集合地と定められたる金谷天神社に行く。神殿に額突き、神鈴の綱とりて、我等が祖道に幸あれといひのる。間もなく一人來り、二人來り、皆集りたれば、早速隊伍を整へて、前發後發と順を追ひて出て行きぬ。後見返れば薄霧のヴェール秋を二重三重に取捲きて、玉打、指月と指さす方も朧にして、淡くかすかに輪郭を殘せるのみ。さらば秋よ。かくて、萩を見捨て、すん／＼上り行く程に、鹿脊坂隧道もうちすぎ、はや明木の市に來りぬ。道を舊道にとり、水聲の響々たるに沿ひて、一

升谷の急坂を喘ぎ／＼上る。午後一時折切に到る。程よき處に腰を下ろし、憩ふこと半時ばかり。遅れし者もやう／＼集りしかば、先生にうながされて、降りしきる雨の中を出て行きぬ。佐々並をすきてより稍々小降となり、いつとなく止みぬ。恰好なる處を擇びて、午食をしたむ。三軒茶屋とか云へるにて、一同の到着を待ち合せ、ともしれば、迂り勝なる峻坂をふみしめつゝ下る。水車の聲を聞き流し、潺々たる細流に沿ひて行くこと十餘町。漸くにして水町に達す。此處にて隊伍を整へて、暫時の休憩をなすべく香川旅館に向ふ。宿の主人の好意にて、焚火に濡れたる服なご乾かすうち、暮色漸く迫りて、家々には、電燈、瓦斯燈、白く、青く、まばゆきばかりに輝きて、夜の町を美しく飾り初めぬ。八時、宿を出で、人通少なき街路を停車場にと急ぐ。九時遂に車上の人となる。小郡にて上り列車に乗り換ふ。轟々たる列車の響雨の窓をたたく音凄じ。右に眺むべき瀬戸の海も、左に望むべき三田尻一帶の野も、闇にとざされて、汽車は只闇黒の中を走るのみ。富海すぐるあたりより、半日の勞に前後もなく、皆々うと／＼と眠りぬ。

五月十三日、火曜日。

山縣 政記す

午前二時五十分廣島驛に下車。同六時の列車にて吳に向ふ。海田市より吳線に入る。隧道の多き忽ち迎へては又忽ち送る。吳驛に着けば、既に吳鎮守府機關中佐白木直四郎、岩田校長令弟、同機關少佐吉田信一(當地篠原海軍大佐令弟)兩氏の、一

行を歡迎せらるゝあり。我等は兩氏に案内せられて、數日來の雨にて、泥濘道を渡すが如き街路を工廠に向ふ。大層高樓兩側に立ち並び、旅客職工等の往來頻繁に、市内電車設備もありて、市况頗る殷賑なり。千百の煙突半空に聳は、鐵槌の響々たる工廠を、右方に見下しながら、漸くコンクリートの高層に沿ひて進む。工廠表門には早業修學旅行隊の到れあり。我等は暫しそこに憩ひたる後、參觀を始め。吉田少佐丁寧の説明せらる。廠内は造船部、造兵部、製鋼部等に分たれ、就中造船部は、規模の去大なる、設備の完備せる點に於て本邦第一なりと聞く。一行は導かざるがままに、在港中の戦艦扶桑を観る。乗組水兵に従ひて艦内を巡覽し、遂に艦橋に登る。數多の艦橋指順の間ありて快甚し。更に歩を轉じて潜航艇に入る。内部の構造、機械の精巧、只々感嘆の外無し。尙かの三萬二千噸の巨艦長門は、盛に建造中なりき。中食を喫し愈々江田島に向ふ。吉田少佐の見送を奈うす。廠内案内の勞と併せて深く感謝する所なり。午後二時江田島に上陸。直ちに長岡旅館に到り、携帶物を置きて海軍兵學校に到る。校門を入ること數十歩、先づ我等が眼に映せしは新築の大講堂なり。宏大と云はんか、壯麗と云はんか、まことに輪奐の美を盡したり。赤煉瓦の生徒館また講堂に劣らず。又意氣揚々たる生徒の姿を見ては、結城嘉堂が、「六百健兒齊鼓楫。更無一箇不英雄。」と詠じけん句も思ひ出さる。折から體操始まる。規律あり、元氣あり、又一絲乱れず。一同恍惚たり。終

りて在學中の先賢諸兄に引率せられて、校内を參觀す。眼に觸るるもの、一として我等が模範たらざるなし。かくて夕陽も將に暮かんとし、旅の疲勞も漸く覺ゆんとする六時頃、一同旅館に歸る。さる程に湯に入り、食事を済し、元氣を快復して、附近の散歩を試む。八時過就寢。時に我等が大先賢にして、現に兵學校の教官たる羽仁少佐、一行を訪問せられ、懇篤なる御話を承る。愈々九時華胥の國にと志しぬ。

五月十四日。水曜日。

岸田隆吉記す

七時宿を出でて奥に向ふ。九時過矣者。發車時刻迄に一時間餘あり。附近の散歩を許されて、一行は各自思ひ思ひの方面に向ふ。十時、こゝを發して廣島に向ふ。紫にかすむ島々、群青の如き海、白銀と輝く帆帆の影、實に繪にも書かまほしきは内海の景なり。我等を乗せたる汽車は、菜園を縫ひ、夢隨をかすめ、白砂青松の間を過ぎて、晝すぎ廣島に着きぬ。驛を出でて、廣島館とか云へるに荷を託して、疲れたる身體を休むる間もなく、電車にゆられて市中見物に赴く。往年深津岩をたたへ、石燈天を摩して、壘を中國に誇りし廣島城も、星霜移りて數十年。今や濠は埋められ、石燈は取拂はれ、兵營あなごなたにたちならび、喇叭たる喇叭の音、軍靴の響の厳しく入りまじりて聞ゆるのみ。古人の詠じけん。

豪門別墅占林邸 翠樹朱欄映水流

の面影は今も偲ぶ由もなし。大木營は、和洋折衷の木造の二階建てにして、元の第五師團司令都そのまなれば、敢て丹青

豊島神社に詣つ。眼前の佳景、まことに日本三景の一たるに恥ぢず。山色水光朱塗の樓閣と相映じたる様、宛ら繪に見る龍宮城の如し。汽船は鏡の如き海面を滑り行くこと十五分、一行を此の風光明媚なる別天地に運び込み。島の名物の美しく飾られたる店の間を過ぎ、大島居を右に眺めて社前に到り、こゝより案内者に導かる。社は島の北端にあり。市村島姫、田心姫、蓋津姫の三女神を祀る。現に官幣中社なり。平相國治盛が御依淺からず、大に殿堂を造營せしは、よく世人の知る處なり。本殿、拜殿、祓殿等、大小の玉樓悉く水に浮び、朱碧波相掩映して浮動せるさま、誰か筆を奮ひ詞を盡さん。句に言はずや、一滿つしほに月より上の宮居かな」と。廻廊は屈曲廻折、長く海上に突出して、遙かなる大島居と相對す。鏡ヶ池のほとり、丹頂鶴遺産せり。西廻廊の盡くる所に寶藏あり。古代の名品、數多陳列せられたり。此處にて案内者を謝し、暫く自由散歩を許可せらる。松並木に沿ひて行けば多くの石燈籠あり。奥池、こゝかに戯れて人に親めり。御手洗川を渡れば、大元公園あり。紅葉谷は陸軍受すべし。尙島内は何處として名所舊蹟ならざるなしといへど、集合時

の彩なく、金銀の飾を施さず、至りて見すばらし。案内の將校に率ゐられて、内部を拜觀するに、掃き清められて、一塵を止めず。森嚴の氣、人を襲ひて止まず。玉座は當時の儘に發されて、先帝陛下の偉大なる御功績の數々を無言の裡に記して、人を感涙の袖をうるほすを覺ゆらさむ。これに隣りて庫一棟あり。日清、北清役に分捕りし大砲、小銃、旗など、所狭くならべられて、皇軍苦闘の歴史の一頁を偲ばしむ。近く皇太后御住居の趾あり。御居間、湯殿、寢室付れも板張の粗末なるものにして、いと畏し。こゝを出でて暫く憩ふ。有名なる大木營前なる大噴水を見る。只覺ゆ。一柱高く天に沖して、乱れて珠となりて落つるを。歩を轉じて天主閣に到る。絶頂は廣き六疊ばかり、展望に便せんがため四方に扉を開きたり。囑目開き、遠近悉く双眸の裡にあり。快を呼ぶ甚し。急ぎこゝを辭し、左屈右折數町にして泉邸に達す。老楓蒼翠として路を蔽ふあり。細流幽韻を傳ふるあり。濯龍池、清風館など之に配し、泉石の布置幽趣を極め、人をして去る能はざらしむ。惜む。池水清冽を缺き規模小なるを。こゝを出でて、一同解散して思ひ思ひの方面に向ふ。近くは比治山に、遠くは宇品に、あなごなたの彷徨へば晚暉姿を没して四邊漸く暗し。急ぎ宿に歸る。

五月十五日。水曜日。

山縣 政記す

午前七時半豊島發、宮島行の列車に投ぜり。沿道の風光を賞しつつ進む程に、やがて宮島驛に着す。こゝより小蒸氣にて

刻の都合上、心飽くまで歴覽する能はず、急ぎ引返し、千疊閣に到りて、大關が榮華の昔を思ひ、更に要害鼻を仰いで、元就公が義戦の跡を追憶し、再び小蒸氣に乗り宮島驛に歸り、午後零時歸途に就けり。移り行く内海の風景更に佳なり。柳井津驛を過ぎてより、汽車は暫く田畦の間に入る。亦十歩一景を生ずるの類にして、景色到る處によし。かくて徳山去り、三田尻去り、大道の松原も何時しか過ぎて、汽車は早くも小郡驛に着す。直ちに輕便に乗り換へ、六時二十分山口驛に着す。相携へて香川旅館に到り、小憩の後、山口高等商業學校の諸兄等特に我等が爲に茶話を催さる。興盡くる所を知らず。九時半名残は惜しけれど、互に將來を祝福して別を告げたり。

五月十六日。金曜日。

好天氣なり。七時山口を後にして歸萩の途につく。再度の案として何等の目を惹くものなし。踏む足も軽く一の坂を越へ二升谷を下り、二時に垂んとする頃ほひ漸く萩の地を踏みぬ。天神社前にて直ちに解散す。終に臨みて、引率の諸先生の終始我等がためにいたく勞を執られしを感謝す。

ますらをば、玉もこがれも、なにかせん。

いのちにかへて、名こそをしけれ。

希典

TWENTY MINUTES BEFORE

THE SENTENCE

By Kozo Nagamine, V: A.

The heat of a summer afternoon was at its height and the well lighted room was fraught with bright air, almost dazzling. The irregular sound of chalk on the blackboard was pervading through the whole class room. Vacuous silence continued for some minutes.

Matsuda was looking down the floor blankly. His face was dark with some anxiety. "Well, it is but a childish brush after all. Not guilty ---no, nothing of it, I am sure." He sneered at himself. "I need not be anxious at it so hard. Why am I of such delicate nerves like that?" He endeavoured to deny the suspense

were surrounded by hundreds of small boats of visitors. Thousands of people crowded on the bridge with faces all tinted with the coloured lights of the boats. He was in the crowd with several class mates. There was standing near him a young fellow, who purposely knocked against him and sneered in his face. The wretch! He must have had a malignant spirit against their school itself --- fierce rage --- oblivion of self --- his clenched fist came down upon the rogue's cheek. His class mates shared his indignation and came to help him. There was a rain of blows, which caused curious people to gather around them to see what was the matter, when taking the advantage of it, the coward slipped away among the crowd. All this was quite a paroxysm of youth. Was it guilty? He then turned his excited face to the teacher, who had been giving sundry advices for the summer vacation which was to begin the next day.

of the punishment which had filled up his brain. "But," he muttered, "considering the precedents of the school, I can count many students who have been expelled from school because they gave drubbings to other school-fellows."

His brain was confused with fears and anxieties. He stopped dreaming and looked up at the window. Noisy cicadas were singing among the deep green leaves dancing in the gentle breeze under the burning sun.

The calmness of the green court outside brought a dreamy serenity into his wearied brain, which, however, soon fell into the retrospection of that night --- the bustling evening of the time-honoured festival in his town. Two vessels, gorgeously decorated with lights and flags, were dragging to and fro on the dark water of the river.

Several young folks in full ancient dress were dancing in those brilliant floating castles, which

He looked around the room and muttered within his lips. "They all appear happy --- anticipation of home life --- nothing besides." They suddenly burst into bright laughter upon some joke the teacher cracked, but he was too agitated to catch the joke. The teacher took out his watch to see the time. At the same time the door opened and the office boy entered with a slip of paper for the old teacher --- a dead silence passed.

His heart misgave him. "There it came at last!" he cried in the depth of his heart.

"Matsuda," read the teacher with cool indifference, "is requested to come to the principal's room soon after school is over."

The blood boiled in his vein --- the throb of pulse at once stood still and then burst into drumming --- his face first flushed and next turned pale. All the heavy anxiety suddenly sank

into the bottom of agony of remorse.

His motionless eyes were fixed on the desk and all the thoughts and feelings had gone far beyond the universe until he was alarmed by the chiming of the last bell of that term.

The class mates went out in confusion, laughing and talking merrily, leaving the room empty.

"Ah!" he frowned and laid his head on his arms, face downwards, eyes shutting, "Yet I have not been right, after all," he groaned. "Still, men are to be more ruled by the worldly restraints than any other creatures."

He felt thirsty and his mouth was almost dried up, but some comfort was stealing into his distracting brain.

Some minutes later he found himself standing at the door of the headmaster's room. He heard the master turning over the pages of some heavy book; "I will make no defence for any sentence he

lesson. The lectures that go in one ear and out the other are no more instructive for the cultivation of his mind than the looking on others who take exercise has any benefit upon the training of his body.

Whatever the subject may be, we must be ready to understand what is taught with our eyes and ears open. This attitude of a student in the school-room will be what we call "study in earnest."

In order to grasp all that we are to learn we should prepare our lessons and to maintain what we have once acquired, we should never fail to review them. Preparation and review help us in making wgat knowledge we have got our own in reality.

When we study we must concentrate our energy upon our subjects. If the rays of the sun are centred upon a bit of paper, they can easily burn it. And so if our spirits are concentrated

will pass upon me. I can live in the nature beyond the world." He thus determined before he held the white handle of the heavy door.

STUDY IN EARNEST

By Shinichi Kishi, V : A.

What exercises are to the body that is study to the mind. To make our body robust, we need some bodily exercises, and to improve our mental faculties, we must study in earnest. In deed, "study" is the first duty of students. A student who happens not to apply himself to study is one who neglects his first duty. Therefore, study--of course it means of persistent nature--has been called the mother of luck.

Then what does the word "study in earnest" mean? We can not call it hard study, if students do not listen to their teacher attentively or not at all to use their minds actively during the

upon one thing, we can readily understand it, however hard it may be.

Even the boy who is called genius, should study for some hours every day. People seem to think that a genius will be able to be much more proficient in his study than the common run of men, without making much effort. But it is a great mistake. I can not believe, for one, that genius, as it is called, can not exist in the world. The story of genius even, so far as it can be told at all, is the story of persistent industry in the face of obstacles. On the contrary, if there be a man who is naturally deficient in his understanding, he should not be disappointed, but only he should be more careful in every thing than others and even what others would be able to master at once is to be repeatedly worked at. Thus he may be able in due time to distance the genius without labour. In fact study is not hard upon students, but

it ought to be a pleasure to them. But to make our lessons delightful, we need a great deal of attention and perseverance.

If the boys of to-day were half as diligent as those of former times. I am sure that they will come to take interest in their lessons. And then their knowledge will be improved day by day.

TO THE SOUTH SEA

By Yoshine Shibata, 4. A

The great war in Europe has come to an end at last, and the warclouds which darkened the sky of the whole world for the past four years have entirely been dispersed by the benign rays of the long wished-for peace.

The conditions of the world have undergone a great change, as compared with those of the days before the war. Especially Germany that was the most powerful country, and superior to

any other nations in science, commerce, and industry has been completely overthrown, and she has lost all the colonies both in the east and in the west. She has been obliged to cede the Solomons, the Palaus, and the Bismarks to Australia, and the Marshals, the Marianas, and the Carolines to Japan.

The time has come for the Japanese to make a great leap in the South Sea. True, Japan is in a very favourable situation for expanding in that direction. See, these islands are inhabited by a people whose blood and colour are the same as those of the Japanese. Rise and proceed to the South, sons of the land of the rising Sun. Indeed the torrid zone is the treasury of the world, and only those who open its door can have the privilege to take possession of the treasures.

States as well as people can not do without the products of the hot climates even for a

moment; for example, teak in building steamers, quinine in medical art, hemp-cloth in industry.

When we take all these things into consideration, I dare say, "No states but that govern the torrid zone deserve to govern the market of the world." The prosperity of Holland in days gone by and the present wealth of England are mostly due to the possession of the tropics.

Oh, young Japan! Go to the south. The bright future of our Empire lies, not in the north, but in the south, not on the continent, but in the sea. The great mission of rising Japan is to make the Pacific Ocean the stage for us to play on.

KIKUGAHAMA IN SUMMER

By Takezo Sakurai, 4. A.

The ripples are playing upon the beach and a cool breeze is blowing gently from the fields.

While I am taking a deep breathing exercise the big bright sun rises in the east. What a grand object it is! His sublimity makes my sleepy eyes wide open and I feel as if he took away all impurity from my inner life. Meanwhile some big birds are seen flying in the golden rays as if they were messengers telling the birth of a new day. A number of small sailing boats are coming back from last night's fishing. Yonder is seen a gentleman strolling on the beach with a boy and two girls toward me. Then we hear the whistle of the Electric Light Company. Birds begin chirping and cicadas singing in the trees. All the world are awake again.

The sun is at its hottest now. Big waves are dashing along the shore. The so-called Nyudoguno are towering here and there. It is unbearably hot in the house, but not so here

on the beach. Boys and girls, men and women are all happy, some bathing, some playing, some running, and others wrestling. They are just as black as negroes. They seem to think of nothing, entirely transported by the grandeur of the sea. Some school girls are talking merrily under their parasols and an artist is earnestly painting from nature. The Mishimamaru from Senzaki is entering the harbour. A flock of sea-gulls are flying to and fro. Cicadas are singing their best. I hear that millionaires make Oiso and Atami their summer resorts spending a lot of money, but all can not afford the luxury. Many would find Hagi an ideal place for avoiding heat and enjoying the beauties of nature, if they only could come here.

People have gone home: some may be at their table, hungry and tired, and others taking a bath talking of to-day's events. The sun has set and

the open sea is lined with fishing fires. The

crimson sky is turning darker and darker and Shizuki-san stands in the sea just like a big black helmer. The sea breeze is blowing from the offing and the silvery moon rises in the west.

The temple bells call people to their evening services. No one is seen along the shore, only the ripples are lapping at my feet. The curtain of the night has fallen. All is left to me and

I stand on the beach of peace and eternity.



會 誌

山口縣體育獎勵會記事

大正七年十二月二十五日。縣立山口中學校に於て、第四回山口縣體育獎勵會開催せらる。本校より出演せし選手は左の如し。

- 剣道部 井町 敏正 鷺 海一 長嶺 幸三
- 柔道部 大谷 三郎 石井 直太 下田 清市
- 平田九郎治 井上 庸造
- 綿谷 三郎 山本登代治 雜賀庚子四郎
- マラソン 玉木正夫 山田 孝介 伊藤 新一
- 河村 茂一

二十五日、(武道)。剣道二本勝負に、下田君の勝。長嶺君の引分、選抜試合に、石井君の一勝。柔道紅白勝負に、山本綿谷君共引分、大谷平田二君の勝。選抜試合に、平田君四人を抜きて五等賞に入りしのみ、前年の勝たる成績に及ばざること遺憾。

二十六日、(マラソン競走)。河村君、全員の中位を占め得たれど榮冠を獲るに至らざりき。

辯論部記事

春季辯論大會(大正八年度)六月二十一日午前十時開會、午後

四時閉會。各辯の熱辯士を振ひて、滔滔と述べ去り述べ來る所、誠に蘇秦張儀をして後に瞻者たらしむるものあり。一年技倆の進むを覺ゆ、將來益々諸君の奮勵せられんことを望む。本日のアログラム左の如し。

- 一、開會の辭 部長 田部 先生
- 二、運動の必要 二ノ三 岡 智教
- 三、旭日を空費してはならぬ 二ノ二 河崎 院
- 四、體力の養成 三ノ三 野村 龍介
- 五、頓智 一ノ二 藤田 延政
- 六、貧乏神論 五ノ一 品川 哲郎
- 七、獅子と甘日鼠(英語) 二ノ二 稲田 保治
- 八、勇氣に就いて 二ノ二 山本 越夫
- 九、男一匹 五ノ二 堀 元助
- 一〇、我等と時間 二ノ一 服部達太郎
- 一一、吾等の進路 三ノ一 高田 真雄
- 一二、犧牲 四ノ一 中原 義胤
- 一三、ナポレオンのアルプス越(英語) 三ノ二 吉武 惠一
- 一四、膽力 二ノ二 高羅 芳光
- 一五、變カラ 五ノ一 堀 儀一
- 一六、尚武 三ノ二 河上 春亮
- 一七、滑稽趣味の快感 五ノ一 長嶺 幸三
- 一八、鳥と水差(英語) 二ノ一 福田 益雄
- 一九、我等の身の上 一ノ二 進藤 研治

- 二〇、人物と其の基本
- 二一、眠と死
- 二二、目的は早く定めよ
- 二三、呼子笛(英語)
- 二四、歐洲戦亂の吾人に與へし
- 二五、閉會の辭

番外
 修學旅行談
 になぐさみ
 徹を見て
 (瀧口吉照誌す)

漕艇部記事

五月二十七日、海軍記念日を卜して漕艇部大會を開く。漕艇部は、先づ我等を抱擁して我々が最善の努力を待つて居る。午前九時を經過すること數分、歡喜に満ち、緊張し切つた五百有餘の健兒は、隊伍蕭々として橋本河畔に到り此に陣取つた。倉開會の號砲が中天に轟いたのは、同三十五分であつた。今年新造した金剛、比叡、吉野、笠置の四隻は、勇氣滿々せる戦士等の鐵腕によつて猛進した。時計は回を追うて歩を進め、十一時半となつた。第二及第四中隊の選手等は、各熱誠の籠つた應援歌に送られて出陣した。午後零時二分、一發の號砲と共に、起る歡呼の聲裡

にスタートを切り、櫂も折れよとばかりに漕いだ。一回二回目には、第二中隊は數回後れた。河時に應援する兩中隊の、或は歡喜する聲、或は悲歌する叫は、續れ續れて一種の噪音否悲痛なコーラスをなした。第二中隊の最後のベストも何等の功を奏せず、遂に勝利は第四中隊に歸した。個人競争數回を経て、第一及第三中隊の選手競漕となつた。時に午後一時五十分、出發の號砲が震動を傳へたのは、二時二十分であつた。其の間兩者相劣らず、猛烈なる練習をみせた。此の競漕や、互角の腕を振つて觀衆をして汗を握らしめた。が遂に第一中隊の勝を占むる所となり、第三中隊は、恨を吞んで退陣した。最後に優勝を争ふべく、第一第四兩中隊選手は、其の甲斐なくしき白き姿を、夕陽の紅く映ゆる清流に浮べた。其中隊に對して全責任を負つた彼等が心程や、實に同情に値するものがある。否、可憐ともいふべきであらう。此の競漕は、遂に第四中隊の勝となり、光榮ある月桂冠は、彼が頭上を飾つた。次に各中隊の選手名并に其の成績時間を掲ぐ

中隊名	通過時間	等級
(一) 第一	十分五十四秒	一
(二) 第二	十分七十七秒	二
(三) 第三	十一分十五秒	三
(四) 第四	十一分三十二秒	四
(五) 第五	十一分三十四秒	五

個人競争に於ては、第二中隊の努力に依つて、彼が優勝旗を獲得するに至つた。競漕終り橋本橋上に集合し、我帝國海軍

萬歳三唱の後我漕艇部萬歳を三唱して、午後六時中閉會した。第四中隊の作つたレコード十分三十二秒は、非常な好成绩だと思ふ。來年度には猶一層の奮勵に依つて、舊レコードを見事破らんことを切に希望する。(T F 生誌す)

野球部記事

五月十七日、放課後津森君の審判の下に第三中隊對第四中隊の試合を行ふ。兩軍の勇氣を衝かん許りなり。奮戦の結果第三中隊の七點、對四中隊の二點にて終る。ソムバー左の如し

中三	松山 松藤 松藤 坪弘 瀧	44	0	0	5	7
中二	村本 本田 屋井 井中 下	44	1	1	2	8
中一	P. C. BI. BII. SS. LF. CF. RF.	44	1	1	2	8
中四	石小 堀河 赤村 長田 岩	38	1	5	5	2
中三	田林 村川 木嶺 中田	38	1	5	5	2
中二	利村 中三 鹽山 井國 増山 中	40	2	4	1	4
中一	好見 田本 弘野 本村	40	2	4	1	4

劍道部記事

大正七年十月二十九日。秋季大會を開く。受賞者左の如し。
 (特別一等賞) 二年 松本喜八郎。(一等賞) 二年 伊藤信雄。
 (特別二等賞) 五年 井町敏正。二年 吉武惠市。市川 且。
 (二等賞) 四年 長嶺幸三。一年 岡村日出人。大橋一夫。
 (三等賞) 阿武健介外十名。(四等賞) 東一郎外二十五名。
 大正八年一月三十日。築稽古後大會を開く。受賞者左の如し。
 (特別一等賞) 二年 國弘重幸。(一等賞) 二年 田村 豊。
 四年 長嶺幸三。五年 鹽澤一。(特別二等賞) 一年 山根芳雄。
 中村秀夫。二年 松本喜八郎。三年 佐々木政秀。(二等賞) 二年 岩田芳夫。小野道治。伊藤信雄。鹽崎長久。(三等賞)

中一	堀長 豊伊 三石 瀧岡 堀	44	1	1	2	8
中三	松山 松藤 松藤 坪弘 瀧	51	1	12	6	14
中二	村本 本田 屋井 井中 下	44	1	1	2	8
中一	P. C. BI. BII. SS. LF. CF. RF.	44	1	1	2	8
中四	石小 堀河 赤村 長田 岩	38	1	5	5	2
中三	田林 村川 木嶺 中田	38	1	5	5	2
中二	利村 中三 鹽山 井國 増山 中	40	2	4	1	4
中一	好見 田本 弘野 本村	40	2	4	1	4

松原六郎外六名。(四等賞)原二人外十八名。

大正八年六月二十六日。春季大會を開く。受賞者左の如し。

- (特別一等賞) 五年 長嶺幸三。(一等賞) 三年 岡村健二。
- 二年 山本貞之。(特別二等賞) 一年 上村義男。(二等賞)
- 三年 伊藤慶。二年 和田五郎。一年 宮田正次。(三等賞)
- 都野勝彦外六名。(四等賞) 井本清外十一名。

柔道部記事

大正七年十月二十九日。秋季大會を開く。受賞者左の如し。

- (特別一等賞) 二年 松島誠。(一等賞) 四年 三浦一夫。(二
- 等賞) 四年 綿谷誠一。三村喜治。山本登代治。三年 瀧下禮
- 二。(三等賞) 大谷三朗外十一名。(四等賞) 村崎四郎外十三
- 名。

大正八年一月三十日。寒稽古後大會を開く。受賞者左の如し。

- (特別一等賞) 三年 中谷由路。(一等賞) 二年 織蔵之進。
- 一年 長嶺武四郎。(二等賞) 三年 村岡勇一。三好芳亮。一
- 年 阿川朝一。岡村誠。(三等賞) 平田九郎治外七名。(四等
- 賞) 井上廣造外十三名。

大正八年六月二十六日。春季大會を開く。受賞者左の如し。

- (一等賞) 一年 増野忠。(二等賞) 三年 長濱幹雄。一年 大島
- 新三。西村秀隆。(三等賞) 河村直道外十一名。(四等賞) 堀
- 元勳外十七名。

京都演武大會出演記事

大正八年八月、京都武徳殿に於て、第二十回大日本武徳會青年大演武會開催せらる。本校より出演せし選手の氏名及成績左の如し。

剣道部

- (中村利作(本校)) ○(都野 豊(本校))
- (瀬戸繁雄(佐賀小城中)) ○(榎原武徳(徳島海養中))

柔道部

- (堀 元助(本校)) ○(山本登代治(本校))
- (大山鹿之助(奈良師)) ○(渡邊 鑑夫(愛知明倫))
- (桑原松次(本校)) ○(野田正吾(京都尚徳館))

剣、柔、各選手は所定の番組の試合を了へ、翌日補試試合を申込み、上階級の相手の誰彼を獲はず、一度或は二度出演し、強敵を屠りしは痛快なりき。

柔道選抜試合に於て、山本君五回まで剛の者と渡り合ひしは、亦異彩なりき。

運動會記事

大正八年十月十八日、陸上大運動會が舉行せられた。本年は、世界平和克復後最初の運動會である。朝来天氣快晴、一片の曇もない。九時一同運動場に集合して、記念歌の合唱があり直ちに競技は、早坂四百米競走を以て開始せられた。應援の聲が天地を震動させる。競技をやる者も、之を應援する者

も、一生懸命である。誰の顔にもはち切れ相な元氣が満ちてゐる。男子の意氣と意氣とがぶつつかつて、毎回面白い氣味のよいゲームを見せる。三年の体操もよかつた。二年のアレイ体操に至つては眞に威服の外はない。一年の手旗体操も一美觀であつた。殊に四年のマスト旗取りは、其の雄壯にして、男性的なる、最も、我等の感歎を惜しまざる所、勁勃たる神州男子の意氣の進るは、此の競技が位たるものであらう。我々に於ては、將來益々かゝる競技の盛んに行れんことを切望する。正午演武合が行はれた。紅白入り混れて誰誰を決する様、其の壯觀言はん方がない。戦今や前である、彼方此方の丁々の聲、天地に轟く喊聲、見よ赤軍の陣營は瀾々とした。陣營は悉く倒れ、大將天野君の奮戦も其の効なく、遂に凱歌は白軍に奏せられた。十二時二十分、再び午後の戦の幕は切つて落された。喧嘩たる喇叭の音が、澄み渡る秋の氣を破て響く時、四五年聯合の中隊教練に行はれた。その風爽たる勇姿、天を衝く意氣、備夫をして起たしむるの概があつた。かの一流の猛者達が、力を拵ふ早坂三千米競走は開始せられた。時に午後三時。四中軍の勇將河上君、怒り草太天振りを發揮して、忽然として群を抜き、最後までそのスピードをゆるめず、遂に月桂冠を戴いた。本日は、定賞が早く終了したので、これ以外にマスト競争と、五手生の副体遊戯、百足競走とがあつて、遂にかの血潮を内圍る中隊選手競走が来た。應援歌に送らるゝ選手の顔には、必勝の色が表はれて居る。

戦の前の悲壯なる静寂は、刻一刻結末に近かんとしつゝある。數千の觀衆は片唾を呑んで居る。俄然號砲は鳴つた。四つのユニホームは見事にスタートを切つて、飛ぶが如くに行く。各選手は勇戦奮闘何れ劣らぬ武者振を見せたが、覇權は遂に第二中軍の手に落ちた。かくて勝者凱歌を奏すれば、敗者無限の暗涙に咽ぶ。腹腹取つて夕陽地に落ち、煙散じて秋冷人に迫る。時に午後五時。かくして一同集合、校歌を合唱して、意義ある第二十周年運動會は局を結んだ。本年も昨年と同じく、競技は眞實的な男性的なものばかりを擇んだ。各自が自己の最善を盡して、最後までその奮闘を續けた事は誠に喜ぶべき事であつた。又競技が滞りなく、豫定以上に進捗した。これ各自の責任觀念が充分に徹底して來たのによるのであらう。之亦歡喜にたへぬ所である。本年も質素なる點に於て昨年以上である。アーチも一箇で、而もそのアーチは例年に比して甚だ小さい物だ。質實は我校の標榜する所、將來とても外部の裝飾は、なるべく廢止するに務む可きである。本年始めて校歌が、完成せられた。今度の運動會に於て、質實義勇の精神がよく、發揮せられたことは、慶賀すべきである。

(阿部芳明誌す)

書道部選書展覽會記事

例年の如く十月十八日に催されたる本部の選書展覽會は、昨年と同じく教師監督の下に一定の時間内に於て一年間に七回

書したるもの中より選出したるもので、眞に各人の實力を發表せるものである。其數一千一百六十一點で、第四第五の兩學年は、主として細字を課せられ、特にペン字を課せられてある。これを學年別でいへば、第五學年は百九十四點、第四學年は二百三十二點、第三學年は三百三十九點、第二學年は二百五十六點、第一學年は百五十一點ある。又一品以上選拔を蒙りたるものは三百七十八人にて、一回も選を受けぬものは、全校にて百四十八人である。又入選を得た數を全校生徒に平均すれば、每人二品小數二に當る。さて、これを中隊別にて統計すれば、第一中隊は九十六人、第二中隊は八十九人、第三中隊は九十八人、第四中隊は九十五人あるが、一等賞のもの五人の内にて、四人は皆三中隊のもので、他の一人は、二中隊である。入選品數は第四中隊の三百二十二點が最多である。是日は、好天氣で、観覧者は多數であつたが、他の畫道部理科部のやうに足を久しく止めて觀るものが少かつたのは遺憾であつた。しかしペン字の立派であつたのは、心あるもの、賞讃を得た。さて、畫道部の方には、有志者の家庭製作品が多く出品せられて居つたが、我部にも、その種類の出品あることを切望する。
〔阿部芳甫記す〕

畫道部展覽會記事

部長曰はく家庭製作品は、教師監督の下に行はざるが故に、審査上に困難あるにより、之を出品せしむるの制を立てず。

一年伊藤君のは、比較的好い出来であつた。二年横山君の作品は、其の考案確に敬服措く能はずである。三年國弘君の作は、詳密なる描寫及其の手腕は、觀客をして咨嗟せしめずには置かなかつた。四年の三戸君の書物は、實に見事に描寫されて居た。筆の動き法も云ひ分あるまい。只色彩が不快に感ぜられはしないかと疑ふ。五年の長岡君の用器畫は、流石に君の性格の表顯とも見るべきであらう。綿密精巧な點は、確に君にのみ限られて居る様に思はれた。

次に家庭製作品の部では、一斑に下級生には張はない様であつた。上手と云ふよりも、寧ろ自然を正直に描寫して欲しい。最優者の姓名及畫題左の如し。

入物	水彩畫臨畫	四年	藤原 智雄
川上の冬	水彩畫寫生	四年	三戸 通夫
壑所	水彩畫寫生	五年	松村 六郎
上野を望む	油繪 寫生	五年	堀 徹一
温室	水彩畫寫生	五年	三好 城輔

四年藤原君の「人物」は、其の勢力其の苦心、實に觀客をして後に瞻若せしめた。四年の三戸君の「川上の冬」は、川上の雪山の景を畫いたもので、山の濃淡の調子が、面白く出来て居た。五年堀君の「上野を望む」は、遠景には山、中景には稻田、近景には、寺、杉、松等あり。色彩の調和云ひ分なく、山の描寫も面白し。五年松村君の「壑所」は、壑所に夕日のさし込んである所で、夕日と煙とが暖つて居る所なのは申分ない。又格

十月十八日、例年の如く開校紀念日を以つて、我が畫道部成績品展覽會は開催された。今から二年前、今日の如き審査の方法と代つて以來、水彩畫油繪の如き家庭製作品、即觀覽客の眼を惹く様な作は次第に衰微した。故に今年は此等落魄の跡に審み、家庭製作品をも重視し、其の等級は學校製作品の外、別に家庭製作品をも之を附與する事とされた。これは實に吾部の一改革である。我等一同は、實に欣喜の情禁じ得なかつたのである。蓋し、繪畫の上達は、練習を主とする故に、家庭製作品の優良は、總て學校成績品の優良となつて表れるのである。

次に學校の成績品に就いて記して見よう。成績品の審査は、例年と同様なれば、色彩は濃しく、畫面は小さく、あまり觀客の視線は惹かなかつたが、其の地味さ、其の寂しさの深いだけ、却つて見る者をして、其の前に足を止めさせた様だつた。これ快速なる筆致と、其靈妙の手腕と、歴然として闔室に溢れて居たからであらう。出品總數七〇五點に達した。其の内一等五名、二等二十三名、三等四十六名等外百一十一名である。其等優秀者の姓名畫題左の如し。

- | | | |
|----|----------------|-----|
| 一年 | 伊藤恒夫(木) | 臨畫 |
| 二年 | 横山秀雄(單獨模倣) | 考案畫 |
| 三年 | 國弘重幸(インキ瓶と吸取紙) | 臨畫 |
| 四年 | 三戸通夫(書物トインキ瓶) | 寫生 |
| 五年 | 長岡義雄(螺旋製圖) | 用器畫 |

地理歴史部展覽會記事

本校創立二十周年記念日十月十八日に於て、例年の如く、地理歴史部成績品展覽會を開催せり。陳列せる成績品は、去年と同じく、第四學年以下各學年に於て、目下修學中又は既修事項に關するものより、各自の意志に任せ、夏季休業中の宿題として課せしものにして、就中優秀なるもの四十五名を選抜し等叙を附せり。第壹等山田一那君の作、萩附近模倣圖は、眞に精確佳麗にして、見る者をして、感歎の聲を發せしむ。君は昨年第一等賞の榮冠を得、今亦第一等を獲たり、今年出品は、從來になき傑作なりき。同じく第一等賞天野君の上古史對照年表及附圖は、刻苦の跡歴然として、その優美なる技巧は、殊に人目を惹けり。其の他一等賞長谷川君の作、見島村模倣圖、藤田君の兩牛球地圖ありたり。以上第四學年なり。第三學年金子君の作、西比利亞地圖は、君獨特の技術によりて美しく彩られ、會場に一層の光輝を放てり。其の他二等賞十七人、三等賞二十二二人ありたり。一般に今年には昨年よ

り進歩の跡の見ゆるは、本部のため大に實すべきことなれども、あまりに裝飾に意を用ひて、却て正確を缺く弊あるもの如し。又餘りこれが爲費用を多く要することなごも考ふべきことなるべし。此の後も益我部のために、一層の盡力あらんことを望みて已まざるなり。
〔矢島良雄記す〕

理科部展覧會記事

我が部は、十月十八日の開校記念日を卜し、理化成績品展覧會を催しぬ。今回の陳列品は、目下修學中の事項に關するものより、各自任意に選擇せしものなり。本年の出品物は大體に於て、昨年より進歩發達せしは誠に慶すべし。中にも第四學年生山中吉郎君の水上自轉車模型、同じく松井安廣の飛行機模型の如きは、今回の白眉と云ふべく、其の工夫努力の點に就いては、大いに賞讃すべく、且つ模範とすべし。諸君來年度には、今一層奮勵努力あつて、我が部の進歩發達に盡されんことを望みて止まざるなり。左に成績表を掲げん。

- 第一等賞 二名
- 第二等賞 一二名
- 第三等賞 一二三名

〔藤永裕記す〕

大正八年度校友會役員

會長 岩田 校長

- | | | | |
|------------|-----------|-------|-------|
| 小川 薫 | 平田久一 | 上野玉市 | 柴田敏夫 |
| 橋 正義 | 玉木利夫 | 大橋一夫 | 竹内忠雄 |
| 原福三郎 | 井町 勇 | 田部秀雄 | |
| 畫通部長 田總 教諭 | | | |
| 委員 堀 儀一 | 長嶺幸三 | 松村六郎 | 三好城輔 |
| 岩武 旦 | 三戸通夫 | 國弘重幸 | 吉村喜熊 |
| 篠原勝利 | 服部達太郎 | 吉村恒助 | 吉村侃二 |
| 山田 壽 | 井上亮介 | 大橋雅治 | |
| 地歴部長 吉田 教諭 | 副部長 古川 教諭 | | |
| 委員 市川恒雄 | 矢島良雄 | 富田正次 | 藤田良平 |
| 岩田芳夫 | 石津兵太郎 | 伊藤喜兵衛 | 村上定介 |
| 笛島 薫 | 藤井勝三 | 中村泰彦 | 池田謙三 |
| 山下達雄 | | | |
| 庭球部長 桐島 教師 | | | |
| 委員 堀野 實 | 賀川 古 | 石津照璽 | 小林義雄 |
| 井本 清 | 津森三郎 | 堀 豐治 | 田村 豐 |
| 山本清春 | 香川義信 | 和田五郎 | 岡村日北人 |
| 山田 壽 | 迫山六郎 | 藤田吉良 | |
| 游泳部長 井村 教諭 | | | |
| 野球部長 船木 教諭 | 山本登代治 | 内藤弘澄 | 監見正一郎 |
| 委員 堀 儀一 | 増野節兼 | 三上直行 | 石田 明 |
| | | | 山田 毅 |

大正八年度

副會長 豐田 教諭

劍道部長 岡部 教師

委員 都野 豐 長嶺幸三 松村六郎 中村利作

井本 清 天野敏介 國弘重幸 玉井忠彦

岡村健二 山本公輔 中村秀夫 木原秀雄

伊藤貞一 惠美須屋三吉 東 收二

柔道部長 青野 教諭

委員 山本登代治 三村喜治 三村一夫 堀 元助

山中吉郎 桑原松次 村田清男 坂 一雄

吉田 博 阿川朝一 秋枝純達 村木正七

西村秀隆 齋頭龜治 三戸忠介

雜誌部長 金子 教諭

委員 岸 新一 都野 豊 藤原敏雄 阿部芳輔

赤川 傳 三戸雄一 柴田美稻 岸田隆吉

松屋初五郎 山縣 政

辯論部長 田部 教諭

委員 河村直衛 市川恒雄 藤井幸太郎 山中 茂

岸田隆吉 天野敏介 高田良雄 吉武惠市

野村龍介 瀧口寛作 高羅朝光 山本貞之

池田三郎 來島勝男 土田伊平

書道部長 安藤 教諭

委員 平田胤春 石津房夫 阿部芳輔 赤川 傳

梶山武夫 厚東誠七郎 石津有恒 金子幸夫

漕艇部長 山本 教諭

委員 岸 新一 野村 茂 藤井幸太郎 藤田孫吉

永富三助 阿武英一 三戸通夫 桑原松次

理科部長 高橋 教諭

委員 堀 儀一 藤永 緒 堀永徳太郎 三戸雄一

厚東誠七郎 松井安廣 小島金作 板垣 堯

褒賞係 頓野教諭 大本教諭 西村正人 山中 茂

委員 神田隆明 石津房夫

器具係 高橋 教諭

委員 河田滿生 吉田鶴太 東 一郎 綿谷誠一

柴田美稻 富田正次 松屋初五郎 津森三郎

會計係 原田 書記

庶務係 三輪 書記

各中隊學科成績調查

大正七年度第二學期各中隊學科成績表

等級	中隊名	受驗人員	合 點	平均點
一	第三中隊	一一二	八〇五八	七一・九四
二	第四中隊	一一八	八四五三	七一・六三
三	第二中隊	一一二	七九八〇	七一・二五
四	第一中隊	一一五	八一四一	七〇・七九

大正七年度學年各中隊學科成績表

等級	中隊名	受験人員	合 點	平均點
一	第四中隊	一一九	八六六四	七二、八一
二	第三中隊	一一四	八二一三	七二、〇四
三	第二中隊	一一四	八一八一	七一、七五
四	第一中隊	一一九	八四三〇	七〇、八四

大正八年度第一學期各中隊學科成績表

等級	中隊名	受験人員	合 點	平均點
一	第三中隊	一二七	九〇六一	七一、三
二	第二中隊	一二〇	八四九五	七〇、八
三	第一中隊	一二五	八七九〇	七〇、三
四	第四中隊	一二二	八四七九	六九、五

武道寒稽古出勤狀況表

(甲) 出席者一日平均數

年 度	延人員	一日平均	部員數	百分比
大正六年	二三八七	一〇九	一九三	五六
大正七年	三二五三	一五五	二一六	七三
增	八六六	四六	二三	一七
大正六年	三三二八	一六一	二八二	五七
大正七年	三七〇七	一七七	二五九	六八
增	三二五	一六	二三	一一

(大正六年度毎日平均全生徒の五割七分出勤)
(大正七年度毎日平均全生徒の七割出勤)

(乙) 皆勤者調

年 度	皆勤者數	部員數	百分比	精勤者數	百分比
大正六年	七九	一九三	四一	二	一
大正七年	九二	二一六	四三	二五	一一
增	一三	二三	二	二三	一一
大正六年	八七	二八二	三〇	二〇	七
大正七年	一〇〇	二五九	三九	三七	一四
增	一三	二三	九	一七	七

(大正六年度全生徒の三割五分皆勤)
(大正七年度全生徒の四割皆勤)

校友會に寄贈

三月十七日、本校第一回卒業生岡村喜代氏より、校友會野球部に左の物品を寄贈せられたり。

- 一、ユニホーム 貳拾八分
- 一、フアストミット 壹個
- 一、靴 貳足
- 一、キヤツミット 壹個
- 一、グローブ 七個
- 一、マスク 壹個
- 一、胸當 壹個
- 一、バット 壹個
- 一、五本 五本

因に、氏は阿武郡萩町平安湖の出身にして、大阪高等商業學校を卒業し、當時大坂に於て、獨力英大小貿易を経営せり。

四月二十三日、林謙一氏より、校友會基金として、京都市公債額壹千五百圓を寄附せられ、それより生ずる年度の利子は、運動獎勵費に充つることとなり。因に氏は梅屋東分村字目代の人にして、當時京都市に住せらる。本年古稀の勳

に當り、賀禮の費用を省かれて、寄附せられたるものなりと云ふ。

十月十五日、萩中學校同窓會員山本百合熊氏は、運動獎勵の主旨を以て、杉丸大百本寄贈せらる。

校友會より寄贈

六月三十日、村田清風翁記念事業費中に金拾五圓を、軍艦河内運糧碑建設費中に金五圓を、又、七月二十五日、阿武郡水害地救済費中に金拾五圓を、何れも寄贈す。

和船建造竣工

四月三十日、校友會新艇四隻成る。吉野朝に因りて忠義心を發揚し、王事に貢獻せしめん主旨にて、比叡、笠置、吉野、金剛と命名す。

大正七年度萩中學校々友會々費收支決算

内 譯	收 入	高
一金千二百參拾六圓四拾貳錢	前年度繰越金	
金四拾壹圓六拾六錢五厘	生徒會費	
金千五拾壹圓七拾錢	職員會費	
金七拾參圓六錢五厘	雜 収 入	
金六拾九圓九拾九錢		

支出 高

内 譯	支 出	高
一金千百七拾圓拾八錢	基金積蓄費	
金五拾圓	短艇新造蓄積費	
金七拾圓	劍道部	
金六拾四圓五拾五錢	柔道部	
金六拾四圓四拾八錢	庭球部	
金五拾八圓參拾五錢	野球部	
金四拾八圓七錢	短艇部	
金八拾四圓拾貳錢	游泳部	
金九圓七拾七錢	雜誌部	
金百拾九圓拾參錢五厘	辯論部	
金貳圓九拾六錢	書道部	
金貳圓七拾七錢	圖書部	
金四圓五拾九錢	運動部	
金百六拾壹圓六拾錢	褒賞部	
金百貳拾五圓六拾九錢	雜 費	
金參百四圓九錢	壹年度へ繰越	
金六拾六圓貳拾四錢		
以上		

大正七年度萩中學校々友會基金收支決算

内 譯	收 入	高
一金貳千六百貳拾四圓拾八錢		

會友訃報

- 石川光一君(第九回卒業生) 大正七年十一月死去。
- 平川新太郎君(第八回卒業生) 大正七年十一月死去。
- 松浦好輔君(第九回卒業生) 大正七年十一月死去。
- 原野邦男君(第十八回卒業生) 大正七年十二月死去。
- 高原啓介君(第十八回卒業生) 大正七年十二月死去。
- 大田三郎君(第五回卒業生) 大正八年二月死去。
- 波根彌六君(第十二回卒業生) 大正八年二月死去。
- 中村正治君(第五回卒業生) 大正八年二月死去。
- 飯田剛一君(第十六回卒業生) 大正八年二月死去。
- 安田 安君(第十四回卒業生) 大正八年二月死去。
- 坂上五一君(第一回卒業生) 大正八年四月死去。
- 原田俊人君(第十七回卒業生) 大正八年三月死去。
- 磯部敬機君(第十八回卒業生) 大正八年四月死去。
- 國近三三君(第十八回卒業生) 大正八年八月死去。
- 横田 弘君(第十三回卒業生) 大正八年九月死去。

金貳千參百四拾壹圓拾四錢
 前年度繰越金
 金貳百八拾參圓四錢
 本年度實收高
 寄附金
 校友會費ヨリ蓄積
 預金利子(證券利子共)
 支 出 高
 金貳千六百貳拾四圓拾八錢
 翌年度へ繰越
 以上
 大正七年度秋中學校友會短絛新造蓄積費決算
 一 金四百九拾貳圓參錢
 內 譯
 金參百六拾貳圓貳拾壹錢
 前年度繰越金
 金百貳拾九圓八拾參錢
 本年度實收高
 校友會費ヨリ蓄積
 利子
 舊短絛賣拂代
 支 出 高
 一金四百九拾貳圓參錢
 內 譯
 金參百八拾圓九拾錢
 短絛新造費及付属品代
 金百拾壹圓拾參錢
 翌年度へ繰越
 以上

校

(自大正七年十一月
 至大正八年十一月)

○本縣師範學校長來校。十一月十九日。山口縣師範學校長八木實光氏來校授業を參觀し、地理、歴史、博物、物理、化學等の特別教室及び寄宿舎を巡視す。

○文部省視學委員來校。十二月九日。廣島高等師範學校教授文部省視學官大島鎮治氏來校主として理化教授を視察す。

○長距離競走。二月八日。午後一時半より秋一周長距離競走を行ひ同三時二十六分三十二秒無事終了。其の成績左表の如し。(行程二里五町)

等別	出發順	隊名	人員	不參加人員	出發時刻	到着時刻	通過時間	平均一人時間
第一	一	第一隊	八	一	一三、〇〇	一三、三〇	二七、〇〇	三、二五、〇
第二	二	第二隊	七	二	一三、〇〇	一三、四〇	二七、〇〇	三、二五、〇
第三	三	第三隊	六	三	一三、〇〇	一三、五〇	二七、〇〇	三、二五、〇
第四	四	第四隊	五	四	一三、〇〇	一四、〇〇	二七、〇〇	三、二五、〇
第五	五	第五隊	四	五	一三、〇〇	一四、一〇	二七、〇〇	三、二五、〇
第六	六	第六隊	三	六	一三、〇〇	一四、二〇	二七、〇〇	三、二五、〇
第七	七	第七隊	二	七	一三、〇〇	一四、三〇	二七、〇〇	三、二五、〇
第八	八	第八隊	一	八	一三、〇〇	一四、四〇	二七、〇〇	三、二五、〇
合計			四一	一〇				

卒業式

○卒業式。三月五日。第十九回卒業式舉行、其の状況左の如し。
 式は午前十時に開始せらる。知事代理として、今村理事官臨場。百餘名の來賓あり。例に依り校長勸語を奉讀し、卒業生七十名に証書を授與す。次ぎて知事代理の、縣賞與規程に據れる賞品、校長の賞品、同窓會長の賞品等の授與あり。終りて校長の誨告、戊申證書の奉讀、長官の告辭、來賓總代小倉信恭氏、生徒總代岸新一君の辭謝卒業生總代福川秀夫君の答辭等豫定の如く進捗し、同十一時二十分無事終了。

長官告辭

卒業生諸子諸子多年修養ニ賜フ茲ニ中學校ノ課程ヲ修了シテ卒業ノ榮ヲ荷フ諸子及諸子父兄ノ喜察スベキナリ本官亦衷心

ノ欣快ヲ以テ諸子ノ卒業ヲ祝ス蓋シ國家ノ中堅ニ幾多新進氣
 鋭ノ人材ヲ加ヘタルバナリ惟フニ中學校ハ國家ノ中堅ヲ育成
 スベク男子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施ス機關ニシテ諸子ノ
 在學中ニ修得セル人格ト識見トハ中堅國民タルノ實質ニ於テ
 缺クル所ナカルベク諸子亦國家ノ中堅ヲ以テ自ラ任シ其ノ信
 スル所深ク其ノ守ル所堅ク邦家ノ進運ニ貢獻スベキ國民的精
 神ノ熾烈ナルハ本官ノ信レテ疑ハサル所ナリ凡ソ國運ノ隆昌
 ハ固ヨリ國民各階級ノ一致協製ニ由ルト雖モ中堅國民ノ獻身
 的ノ努力ニ待ツコト更ニ緊切ナルヲ感ス是レ國家カ中堅國民ニ
 甚大ノ望ヲ屬シ之レガ育成ニ深ク留意スル所以ナリ今ヤ國家
 内外ノ情勢ハ刻々ニ進轉シ外ニ在リテハ正義人道ノ爲世界改
 造ノ機運勃興シ内ニ於テハ國家ノ樹立ト共ニ富源ノ開拓文化
 ノ發展ニ一日ヲ緩ウスヘカラサルモノアリ國事益々多端ニシテ
 國民ノ使命彌重キチ加フ諸子此ノ間ニ處シ毅然トシテ起テ敢
 然トシテ進ムノ概アルヲ要ス望ムラクハ諸子其ノ進ミテ高等
 ノ學府ニ入ルト將々又社會ノ實務ニ從事スルトナラズ心ヲ
 人格ノ修養ニ潛シ毎ニ名節ヲ重シ道徳ノ實踐知見ノ研鑽ニ
 努メ以テ金匱無缺ノ國家ヲ擁護シ皇國ノ地歩ヲ磐石ノ上ニ確
 立スベク夙夜淬礪ノ忠誠ヲ捧ケムコトヲ是レ中堅國民タルヘ
 キ諸子ノ天職ニシテ上聖明ニ對ヘ下國民ノ囑望ニ副フ所以ナ
 リ之ヲ告辭トス

大正八年三月五日

山口縣知事正五位勳三等 中川 望

これ亦、一種の不安定にあることは、言を俟たぬことであり
 ます。或る成金は、三百圓の衣裳を調へて、其の娘を嫁
 に遣るものもあり。又一夜の宴會費に、一人前が二百圓六
 百圓といふ大金を費したのもある。一方より見ると、非
 常に安定な様でありますけれども、これは精神の健全な安
 定と認めることは出来ないものであります。又中流社會
 あることを、斷言して俾れないのであります。又中流社會
 は如何と見るに、食糧問題の爲に、不安定の状態にあるの
 であります。然らば學生は如何。上大學より下小學校に至
 るまで、此の頃の様な場合では、學校の状態の上に、憂ふ
 べき思むべき事實の多いことは、恐らくはこれまでに無い
 ことでありませう。各皆本分を忘れて努力しない、ごまか
 す疑ぐ浮いて居るのであります。此の如く、今日の社會の
 不安定といふことは、誠に複雑して居る。所有社會の者が
 不安定の位置に居るのであります。然らば我々は、此の時
 代に處するに、如何してよいかと云ふ問題を研究せねばな
 らぬのであります。さう云ふ社會に、今諸君を送り出す私
 の感じから云ふと、此の地位心配に堪へない卒業式を挙げ
 たことは、今日までにはないのであります。年々歳々中學
 校卒業生は高級の學校に入るのでありますが、入學後の買
 績が擧げない。さういふ者が、やがて社會の中心となつて
 働くのは、將來の不安定を來す原因であります。諸君は、
 奮闘ある其の歴史を負つて社會に立つ以上は、此の不安定

校長告辭

(O.K.生筆記)

卒業生諸君、私は、今、諸君一同に對し、學校長として、
 聊か錢別を呈したいと思ふのであります。本日は、特に、
 長官代理官始め、多數貴賓の前で、話すことであれば、諸
 君の腦裏に印象せらるゝことも、平生より一段と深甚なる
 ものがあるであらうと思ひます。その話は、不安定と申す
 ことに就ての所感であります。彼の弘安四年の役は、非常
 に、國民が不安定を感じたときでありました。此の原因は、
 元の忽必烈に對し、我國の、或は危からんことを心配する
 不安定でありまして、原因は、極めて單純なものでありま
 した。幸にして、國民は、遂に此の不安定より逃れること
 が出来たのであります。明治維新の不安定は、幕府に對
 する反感で、多數の國民の不安定には相違なかりしも、猶、
 其の原因に至つては、これ亦單純にして、割合に短時日に、
 之を除去することが出来たのであります。つらく、今日
 の社會状態を察するに、此の位不安定な状態をば、有史
 以來、未だ曾て嘗めた時代はないのであります。現時の不
 安定は、其の原因が頗る複雑であつて、其の由來する所が、
 非常に混雜を極めて居るのであります。少し立ち入つて話
 せば、上流社會は思想の變化(テモクラシー)で、頗る不安
 定の状態であります。又富豪は、一朝、米騒動と云ふ思む
 べき出來事の爲に、これ亦、心中不安定の状態にあること
 を信ずるのであります。然らば、成金は如何と云ひますに、

なる状態をして、安定なる位置にあらしむる大なる抱負を
 持たねばなりません。さて此の不安定を治するに最も効果
 の多い藥があります。それは他にあらず。明治四十一年十月
 十三日に下し賜うた成申證書であります。成申の年も不安
 定の状態にあつたには相違なきも、其の年よりも今日の社
 會が猶不安定であります。されば此の藥は成申の年より
 も、今日の社會を救済する適藥と申さねばなりません。此
 の卒業式に當りまして、今一度成申證書を奉讀しますの
 で、此の證書が今日の不安定を治する藥であることを、深
 く心に銘せられむことを望むのであります。

卒業生の氏名左の如し。(イロハ順)

- | | | | | |
|-------|-------|----|----|----|
| 伊藤富士雄 | 板垣 | 克 | 板谷 | 一馬 |
| 磯部 好人 | 磯部 | 哲次 | 磯松 | 嶺造 |
| 今田 正一 | 池永 | 正治 | 石田 | 藤一 |
| 石井 直太 | 飯塚 | 正規 | 萩原 | 新市 |
| 岡 五郎 | 篤海 | 一 | 和田 | 義忠 |
| 和田 卓 | 綿谷 | 三郎 | 川上 | 清水 |
| 河上 勇治 | 河村久三郎 | | 兼田 | 三衛 |
| 高 勉 | 高羅 | 芳光 | 笠原 | 二人 |
| 上川 忠夫 | 吉田 | 寛 | 俵 | 武雄 |

玉一市五郎	武田 正	津田 信
内 俊造	中村 岩穂	中村 敏雄
永井 從敏	村橋 徳治	村木 榮熊
梅田 文武	井上 庸造	井上 盛義
井町 敏正	大谷 三朗	大深 安治
國重敬四郎	久保 諭一	百濟 芳雄
山田 孝介	山本 義男	山田 基
前田 牧造	前田 壯一	松岡 通雄
松浦 孝義	松崎 寛爾	藤田 重成
福川 秀夫	小松 咸一	小枝 慎一
赤崎 健吉	阿武 莊	阿武 健介
安藤 義雄	宮國 則義	柴田 健正
志賀 義雄	下田 清市	新藤 武彦
廣田 良吉	平田九郎治	間田 正男
杉 彦熊		

受賞者氏名左の如し
一銀制時計一個 (懸賞與規程に據れる者)

福川 秀夫 壹部
一機範英和辭典 壹部
福川 秀夫 松浦 孝義 井上 盛義

福川 秀夫 井上 盛義 松浦 孝義 吉田 寛
中村 敏雄 村橋 徳治 志賀 義雄

○陸軍記念日講話。三月十日、陸軍記念日に就き、午後一時ヨリ、陸軍輜重中佐秋山貞一氏ノ、西比利亞出征ニ關シ、輜重上ニ於ケル基礎的講話アリ。快活ノ辯、明晰ノ言、聴衆大ニ感動ス。午後三時終了。

○共通比較試験。三月十五日、縣下各公私立中學校の第四學年生徒に就き、學力共通比較試験行はる。試験科目は、英語數學の二科ナリ。

○賞品授與式。四月八日、始業式後引續き賞品授與式舉行せらる。受賞者左の如し。

一防長の精華 壹部 筆記帳 貳冊
第三學年 石津 有恒 第二學年 原 吉雄
第一學年 服部達太郎 吉村 恒助
平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ學力俊秀ニシテ伍長トナリテハ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍リテ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)

一防長の精華 壹部
第四學年 岸 新一 阿部 芳輔 第三學年 柴田 美和 第二學年 高田 真雄 吉武 惠市 吉田 博三 上野 玉市
學力俊秀ニシテ能ク校則ヲ守リ伍長トナリテ能ク其ノ任務

學力俊秀ニシテ能ク校則ヲ守リ伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍リテ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)

一言海 壹部 井町 敏正

平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ皆勤五箇年ニ及ブ洵ニ恩ノタリト謂フベシ仍リテ前記ノ物品ヲ賞與ス

一言海 壹部 藤田 重成

平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ皆勤參箇年精氣百倍ニ及ブ洵ニ恩ノタリト謂フベシ仍リテ前記ノ物品ヲ賞與ス

一言紙 壹部

池永 正治 津田 信

平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リタリ仍リテ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)

一言紙 壹部

中村 敏雄 石田 藤一 吉田 寛 小松 咸一

河村久三郎 志賀 義雄 高羅 芳光 飯塚 正規
本學年伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)

一精勤賞狀

井上 盛義 門田 正男 兼田 三衛 松岡 通雄
河上 勇治 内 俊造 中村 岩穂 梅田 文武
飯塚 規正

本學年間精勤セシニヨリ之ヲ賞ス (各通)

一山口縣立新中學校同窓會獎券賞

一筆記帳 貳冊
第四學年 金子四郎 第三學年 小島金作 岸田隆吉
第二學年 石津兵太郎 坂 一雄 小川 薫
第一學年 箭島 薫 稻田保治

平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍リテ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)

一筆記帳 貳冊

第四學年 西村正人 瀧口吉繼 矢島真雄 金本 龍一 山中 茂 玉木正夫 三戸雄一 尾木忠夫 赤川 傳 第三學年 松屋初五郎 篠原智雄

鈴木研介 天野敏介 井本 清 津森三郎 岩 武旦 藤田真平 第二學年 吉村喜熊 市川 且 椿 正義 野村副介 堀 豐治 岩田 芳夫

平田久一 伊藤喜兵衛 柴田敏夫 篠原勝利

第一學年 柳並武夫 小野基治 瀧口寛作 岡村 城 竹内忠正 木原秀雄 山本貞之 同 智教

永田忠正 村上定介 福田幹雄 村木正七 藤 井勝三 山根芳雄

本學年間伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)

一筆記帳 貳冊

第四學年 西村正人 金本龍一 吉田鶴太 尾木

忠夫 赤川 傳 堀野 實 石田房夫 平田胤春
第三學年 柴田美裕 小島金作 井本 清
本學年間室長トナリ能ク其ノ任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ
物品ヲ賞與ス (各通)

一賞狀

第四學年 河村義雄 第三學年 今田次郎 戸倉芳
太郎 松井安廣 富田正次 岩武忠幸 三好章
田中秀先 守田吉光 厚東誠七郎 第二學年 金子
豐 田中逸三 能美惠一 内藤貫之 普喜真術
河上春亮 武田憲雄 村木 曠 小野道治 鈴
木勳 光藤秋一 神田壽治 門田省三 安藤次
郎 柏木直南 田中儀明 第一學年 河崎 院
島居 勝 齋藤 鏡 山田精華 野村 要 山
樞熊藏 横山秀雄 兒玉 正 寺田進治 山本
小輔 竹下五郎
平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リタリ仍リテ之ヲ賞ス (各通)

一賞狀

第四學年 栗屋 豊 第三學年 長井博通 三上直行
山縣正一 第二學年 堀 豊治 河原八重次 松尾
志義 島本竹次郎 第一學年 末成重信 鈴木一夫
福田幹雄 高羅初光 波多野義實 原田 泰
岡村日出人
本學年間精勤セシニヨリ之ヲ賞ス (各通)

行りますので、實に結構であります。諸君は、此地に生れて、
此地に居る爲に、左程感じないかも知れぬが、松陰先生の
遺風は偉大なもので、諸君は、知らず識らずの間に、非常
な感化を受けて居られるのであります。此の點から見ると、
諸君は、日本全國で一番幸な中學生であります。萩は青英
の土地としては、實に日本一であります。私は諸君の將來
に對し、御成功を望み、其の幸福を祈ります。これから諸
君の御感想を承りませう。誰か發言して下さい。
是の時第三學年高田良雄、第五學年岸 新一、第二學年服部達
太郎の三生、更る更る起立して其の所感を述べ、中將は、驚
き了りて、

時間の都合もありませんからこれで指さします。私は諸君の御
感想を聞いて喜ばしく思ひます。偏に御成功を祈ります。
の辭を讀んで壇を下る。次に校長の挨拶あり。終りて九時ニ
十分、中將は、校長の先導にて、植物園に赴き、記念の爲、高
さ五尺餘の松樹一株を植へて歸去せらる。次で十時半より教
員生徒一同、志都岐山北麓に到り、第二艦隊の出港を送りた
り。

○學友長選舉、四月十八日、學友區正副友長の選舉を
行ふ其の結果左の如し。
東萩學友區 區長 田中 敬諭
第一小區學友長 市川 恒雄 副長 堀 儀一
第二小區學友長 串村 利作 副長 植田 浩

式終了後、文學博士渡邊世祐氏の講話あり。(別項講演参照)
○軍艦觀覽。四月十五日、午前七時、教員生徒一同、風
雨を冒して軍艦標名に赴き、午後三時觀覽を終りて辭去す。
○霧島艦長來校。四月十六日、午前十一時十分、霧島
艦長海軍大佐勝木源次郎氏(秋町江向出身)來校せられ、一場
の講話を試みらる。(講話欄参照)

○山屋司令官一行來校。四月十七日、午前九時十分
第二艦隊司令官山屋海軍中將、參謀長中川海軍少將、機名艦
長佐野海軍大佐、比叡艦長吉川海軍大佐、霧島艦長勝木海軍大
佐其他一行總て十一人來校せらる。生徒に對する山屋中將の
講話の大意は左の如し。

一昨日は、風雨烈しい中に、諸君は機名艦を觀覽せられま
したが、甲板の上から見て居りますに、諸君は全身すぶ濡
れになられ、中には船堂を備された方もありました様で氣
の毒でありました。後に聞けば一二の負傷者も出來た様子、
又校長より聞きますれば、之が爲に、風邪に罹られた人が
三十名ばかりもあつたさうで、稱更御氣の毒でした。本日
は諸君の御感想を聴きたうあります。しかし、それに先だ
ちて、私が萩に來た感想を御話しまして、其の後に聴くこ
とにさせよう。さて私は萩には此度始めて参りましたが、
萩は誠に淳朴な土地であります。清潔な土地であります。
此の地に學ばれる學生たる諸君は、誠に幸福なことであり
ます。維新前後多數英傑の輩出された上に、松陰神社があ

- 南萩學友區 區長 金子 敬諭
第一小區學友長 堀 清石 副長 室田 外雄
第二小區學友長 島田 潔晴 副長 弘 達一
第三小區學友長 寺田猪三郎 副長 富田 正次
西萩學友區 區長 舟木 敬諭
第一小區學友長 赤川 傳 副長 小林 義雄
第二小區學友長 金子 四郎 副長 藤井幸太郎
北萩學友區 區長 岩坪 敬諭 副長 守重 智泉
第一小區學友長 阿部 芳甫 副長 藤永 裕
第二小區學友長 松本 忠一 副長 藤永 裕
第三小區學友長 堀 元助 副長 金山 芳雄
中萩學友區 區長 安藤 敬諭 副長 長岡 義雄
第一小區學友長 長嶺 幸三 副長 山中 茂
第二小區學友長 玉木 正夫 副長 高津 市熊
長三小區學友長 三戸 雄一 副長 村上 剛明
椿東學友區 區長 頓野 敬諭 副長 厚東誠七郎
第一小區學友長 三村 喜治 副長 田中 文夫
第二小區學友長 三好 孝平 副長 岸田 隆吉
第三小區學友長 野村 茂 副長 藤田 孫吉
南萩學友區 區長 田中 敬諭 副長 藤田 孫吉
學友長 岸 新一 副長 藤田 孫吉

- 山田三見學友區 區長 山本 教諭
- 第一小區學友長 伊藤 伍一 副長 三上 直行
 - 第二小區學友長 今田 治郎 副長 永富 三助
 - 第三小區學友長 神田 隆明 副長 植村 文雄

○西村中將來校。四月二十一日、西村陸軍中將來校、授業參觀後、生徒一同に對し、徳性涵養の忽にすべからざることを饒々演述せらる。

○皇太子殿下御成年奉祝式。五月七日午前八時より、教職員生徒一同講堂に會し、皇太子殿下の萬歳を三唱して、其の御成年を祝し奉り。同九時式全く終る。此日校長の訓話あり。

○修學旅行。五月十二日、第四學年修學旅行隊、元東、田總、相島三教師引率の下に、三泊四日の予定を以て、廣島縣江田島方面へ出發す。(修學旅行記參照)

五月十七日、左記の如く一日修學旅行行はる。
 第五學年 赤羽景清穴見學、第三、二學年大井水力發電所見學、第一學年 萩近傍史蹟調査

○藤井直喜氏來校。五月二十日、藤井直喜氏來校。生徒一同に對し、一場の講話を試みたり、先づ審判に於ける自己の經營に關する講義栽培の實況より説き始め、次に講義栽培

○本縣内務部長來校。七月十五日、午後六時四十分長本縣内務部長來校。地理、歴史、博物、物理化學の特別室を巡視し、同七時三十分辭去せらる。

○開校記念式。十月十八日午前八時より、第二十回開校記念式を舉行す。來賓五十餘名。校長の式辭に次で、來賓總代岡村郡長の祝辭朗讀あり。同第九時終る。式後、校友會の催に關る、陸上大運動會、生徒成績品展覽會等ありたり。

○縣視學委員來校。十月二十四日午前八時、山口縣視學委員山口高等學校教授田淵一耶氏來校、主として數學科教授を視察せられたり。

○文部省視學委員來校。十月二十七日午前八時、文部省視學委員第五高等學校教授小松倍一氏來校。主として歴史科教授を視察せられたり。

○寄贈品。十月二十二日軍艦機名艦長海軍大佐野常羽氏より、機名艦大寫眞額面一箇を、又十月二十五日樺村故平田初熊氏令息與一氏より、亡父追善の爲として、獎學金五百圓を、何れも寄贈せらる。

送迎彙報

- 梅村先生。愛知縣立第五中學校に榮轉。十一月二十七日告別式舉行。
- 玉井先生。十二月九日就任式舉行。擔當學科數學歴史。
- 池上先生。石川縣立第二中學校に榮轉。一月九日告別式舉行。

培に着手する迄の踞路其の苦心に及び、有爲の男子は、將來大に南洋方面に發展して、國富を増益すべしと絶叫して壇を下る。言々句々、悉く實歴に關するもの、眞に肺腑より出て、些の虚飾なく誇張なし。大に聽衆を感動せしめたり。

○上山滿之進氏來校。五月二十六日、貴族院議員上山滿之進氏來校、授業參觀後、生徒一同に對し、一場の講話あり(講話備參照)

○海軍記念日。五月二十七日、海軍記念日、校長の訓話あり(講話備參照)

○黒田鳳心氏來校。六月十六日、大阪毎日新聞記者黒田鳳心氏來校。一場の講話をなす。其の要旨は、「將來の青年は、大に海外に發展して、第二の日本を編制組織せねばならぬ。その舞臺は、西比利亞が第一である。支那は排日などいつて騒ぐけれど、西比利亞は、大に日本を歓迎して居る。(此の間に、有名な親日黨セミノフ將軍の立志傳を述べ)かういふ有様であるから、日本と西比利亞とは、日に月に親密なる關係の下に於て、提携の實を舉げつゝあれば、將來は、その活動舞臺を此の方面に水めればならぬ」と云ふにあり。因に氏は、數年來露西亞の各地を巡遊して各國民の活動状態を視察研究し、今年歸國せられたるなり。

○講和條約調印濟祝賀式。七月一日、講和條約調印祝賀式舉行せられ、校長の訓話あり。(講話備參照)

○中村先生。久しく病氣にて引籠養中の處、二月十七日附にて依願免職。

○西山先生。四月八日就任式舉行。擔任地理歴史科。

○古川先生。福岡縣立東築中學校より轉任。四月八日就任式舉行。擔當地理歴史科。

○井村先生。愛媛縣立大洲中學校より轉任。四月八日就任式舉行。擔任體操科習字科。

○高橋先生。秋田縣横手町立實科高等女學校より轉任。四月二十六日就任式舉行。擔當物理化學科。

○清水先生。大阪府立市岡中學校に榮轉。四月二十六日告別式舉行。

○石井先生。岡山縣立女子師範學校に榮轉。四月二十六日告別式舉行。

○大本先生。五月一日就任式舉行。擔當國語及漢文科。

○木田先生。依願免職。五月五日告別式舉行。

○江藤先生。鹿兒島縣立川邊中學校より轉任。七月一日就任式舉行。擔當數學科。

○東先生。八月二十一日附を以て滋賀縣へ出向を命ぜられ、滋賀縣立膳所中學校に轉任せらる。

○川井先生。八月三十一日附を以て依願解職。

○豐田先生。滋賀縣立福岡中學校より轉任。九月一日就任式舉行。擔當學科修身歴史。

○夏原先生。廣島縣立三次中學校より轉任。九月一日就任式舉行。擔當英語科。

○岡部先生。九月四日就任式舉行。劍道擔當。

○元重先生。十月九日附を以て福岡縣へ出向を命ぜられ、福岡縣立豊津中學校に轉任せらる。

○吉田先生。阿武郡萩町立商業學校より轉任。十月十三日就任式舉行。擔當地理歴史科。



○元重先生。十月九日附を以て福岡縣へ出向を命ぜられ、福岡縣立豊津中學校に轉任せらる。

○吉田先生。阿武郡萩町立商業學校より轉任。十月十三日就任式舉行。擔當地理歴史科。

○元重先生。十月九日附を以て福岡縣へ出向を命ぜられ、福岡縣立豊津中學校に轉任せらる。

○吉田先生。阿武郡萩町立商業學校より轉任。十月十三日就任式舉行。擔當地理歴史科。

附
錄

附 録

山口縣立萩中學校沿革略

本校は舊藩主毛利氏の設立に係る巴城學舎に蓋脇す○後改めて公立中學校となし明治十一年五月又改めて山口中學校の分校として大に教則を改正す○十七年山口中學校の高等中學校となり文部省の所屬に歸するに及び三月十一日を以て本校は萩分校と改稱せられ高等中學校の豫備校とされり○二十年四月一日改めて萩高等中學校別科と稱せられ重見經誠氏主幹となる同年八月重見氏轉任し綿貫謙輔氏代る○同年十二月萩學校と改稱せらる○二十一年一月職制の改正あり綿貫氏校長に任せらる○二十三年四月公立を改めて私立とせられ防長教育會の所營に歸せり○二十九年九月防長教育會之本縣に寄附し山口縣立山口中學校の分校となし校則の全部を改正す○四月一日綿貫氏萩分校主事を命せられる○三十年八月三十一日山口縣尋常中學校萩分校と改稱せらる○三十一年三月教諭渡邊盛次郎代りて主事

心得となる○同年四月渡邊盛作氏主事に任せらる○三十二年九月一日分校より獨立して山口縣立萩中學校となり縣令を以て規則を發表し職別並に事務章程を定められ元萩分校生徒二百九十三名に加へて新に百十名の入學を許し渡邊盛作氏校長心得を命せらる是より先校舎は江向村なる明倫館跡に在りしが是に至り堀内村なる新築校舎に移る○同月十八日雨谷羔太郎氏校長に任せらる○十月十八日開校式を行ひ此日を以て本校の紀念日と定む○三十四年四月十五日第一回卒業式を行ふ卒業生三十七名是月始めて補習科を設く○三十五年二月新築寄宿舎を開き舎生を收容す○同年四月十七日第二回卒業式を行ふ卒業生四十二名○三十六年三月二十九日第三回卒業式を行ふ卒業生五十一名○三十七年三月三十日第四回卒業式を行ふ卒業生五十二名○同年十月十二日雨谷校長病歿せられ教諭塚本又三郎氏校長事務取扱を命せらる同年十二月七日塚本氏校長に任せらる○三十八年三月二十七日第五回卒業式を行ふ卒業生四十三名、是月縣令を以て共通入學試験の制を定めらる○同年八月塚本校長第二高等學校に轉任せられ教諭岩田博藏氏校長事務取扱を命せらる○九月長崎縣立島原

中學校長羽石重雄氏校長に任せらる。○三十九年三月二十七日第六回卒業式を行ふ卒業生六十一名。○四十年三月二十七日第七回卒業式を行ふ卒業生五十六名。○四十一年三月二十四日第八回卒業式を行ふ卒業生四十四名。十一月三日戊申詔書奉讀式を講堂に行ふ。○四十二年三月二十三日第九回卒業式を行ふ卒業生三十八名。本年より縣令を以て共通試験を廢せらる。○四月三十日羽石校長岩國中學校長に轉任せらる。○五月七日熊本縣立八代中學校長村上俊江氏校長に任せらる。七月七日戊申詔書奉讀心得を願つ。○四十三年三月二十四日第十回卒業式を行ふ卒業生四十九名。○四十二年一月一日寄宿舎の名を定めて誠之學舎と云。○四十四年三月二十四日第十一回卒業式を行ふ卒業生四十七名。○四十五年三月二十四日第十二回卒業式を行ふ卒業生五十二名。○七月一日公原氏獎學金給與規程成る。○大正二年二月七日訓令第五號を以て山口縣立中學校共通入學試驗施行規程を定めらる。○三月二十七日第十三回卒業式を舉行す卒業生九十五名。○十一月四日久原氏獎學金給與規程第五條の次に現第六條を追加し元第六條以下を順次繰下ることゝなれり。○三月十九日第十四回卒業式を舉行す卒業生五十九

職員表

(大正八年十月末現在)

受持學科	職名	就職年月	氏名	原籍地
修身、英語	校長	大正五年九月	岩田博藏	山口縣
英語	教諭	明治三二年九月	頼野多介	山口縣
漢文、作文	教諭	明治三二年九月	安藤紀一	山口縣
代數、幾何、三角	兼舍監	大正八年七月	江藤豊吉	大分縣
法	兼舍監	大正八年八月	豊田	山口縣
歷史、修身	教諭	大正七年六月	藤井一郎	廣島縣
代數、幾何	教諭	大正七年三月	田部克己	鳥根縣
英語	教諭	大正八年九月	夏原由三郎	滋賀縣
英語	教諭	大正八年四月	西山與三吉	山口縣
國語、作文、文法	兼舍監	明治三八年五月	田中市郎	山口縣
博物	教諭	大正八年十月	吉田祥湖	山口縣
地理、歷史	教諭	大正五年一月	船木秀一	山口縣
代數、幾何	教諭	明治四十年四月	金子乙助	山口縣
國語、漢文、作文	教諭	大正八年三月	古川啓藏	山口縣
文法	教諭	明治三八年四月	田村百合之助	山口縣
歷史、地理	教諭	大正七年十月	岩坪友幸	鹿兒島縣
圖畫	教諭	大正七年八月	青野芳三郎	愛媛縣
英語	教諭			
漢文、作文、柔道	教諭			

名。○四年三月二十日第十五回卒業式を行ふ卒業生六十七名。○五年三月二十四日第十六回卒業式を行ふ卒業生六十九名。○八月三十日村上校長退職せらる。○九月二十五日愛媛縣立松山中學校長岩田博藏氏校長に任せらる。○十一月三日立太子禮奉祝式を舉行す。○六年二月四日皇后陛下御眞影奉戴式を行ふ。○三月二十二日第十七回卒業式を行ふ卒業生六十九名。○十二月二十七日皇太子殿下御眞影を奉戴す。○七年二月二十一日久原氏獎學金給與現程第二條の次に現第三條を又第七條の次に現第九條を追加し元第三條以下を然るべく繰下ることゝなれり。○三月九日第十八回卒業式を行ふ卒業生七十六名。○八年三月五日第十九回卒業式を行ふ卒業生七十七名。

物理、化學	體操、習字	國語、作文	體操	英語	英語	體操	算術、歷史	劍道	會計	庶務
教諭	教諭	兼舍監	兼舍監	兼舍監	兼舍監	兼舍監	兼舍監	兼舍監	兼舍監	兼舍監
大正八年四月	大正八年三月	大正八年四月	大正八年八月	大正七年八月	大正七年八月	大正七年八月	大正七年八月	大正七年八月	大正七年八月	大正七年八月
高橋鶴吉	井村清一	大本信雄	山本百合	山本百合	山本百合	山本百合	山本百合	山本百合	山本百合	山本百合
山口縣	山口縣	山口縣	山口縣	山口縣	山口縣	山口縣	山口縣	山口縣	山口縣	山口縣

學級數及生徒數表

(大正八年十月末現在)

種別	第五學年	第四學年	第三學年	第二學年	第一學年	合計
學級數	二	二	三	三	三	一三
生徒數	五	五	一五	六	一四	五二

武學貸費生

第五學年 三戸雄一、河村直衝、

寄贈雜誌

- 一 學友會報 五十九號 山口高等商業學校學友會
- 一 校友會會報 十八號 山口岩國中學校校友會
- 一 知道月報 每號 茨城水戸中學校知道會
- 一 早稻田學報 每號 早稻田大學校友會
- 一 會誌 創刊號 萩町立商業學校
- 一 校友會雜誌 十七號 山口豐浦中學校校友會
- 一 校友會雜誌 十九號 九州藥學專門學校校友會

- 一 校友 四號 山口室穂師範學校校友會
- 一 校友會誌 二十一號 山口德山中學校校友會
- 一 保惠會雜誌 百十三號 愛媛松山中學校保惠會
- 一 かしろ山 二號 縣立松山中學校保惠會
- 一 南園會報 九號 阿武郡立女學校南園會
- 一 校友會誌 六十號 實科高等
- 一 三田評論 每號 下關商業學校校友會
- 慶應義塾

會告

- 一、本誌は會友諸君の寄稿を切望す。期限は九月末日までとす。用紙隨意。
- 一、本誌の發行は毎十一月とす。

大正八年十二月五日印刷
大正八年十二月十日發行

〔非賣品〕

發行兼編輯者 山口縣阿武郡椿村 三輪 勗

印刷者 山口縣吉敷郡山口町道場門前第九番地 大津 いわ

印刷所 全上 山口響海館

